

菊川町埋蔵文化財報告書 第14集

ひがしよこ じ にしはら い せき

東横地西原遺跡発掘調査報告書

1988

静岡県菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財報告書 第14集

ひがしよこじにしばら
東横地西原遺跡発掘調査報告書

1988

静岡県菊川町教育委員会



下面完掘状態（航空撮影）



上面完掘状態（航空撮影）

例　　言

- 1 本書は、昭和61年8月20日から昭和61年10月6日にかけて実施した静岡県小笠郡菊川町東横地に所在する東横地西原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、周知の遺跡内において雇用促進住宅建設工事が計画されたためである。調査に要した費用は町で負担した。
- 3 発掘調査は菊川町教育委員会が実施した。

調査主体　菊川町教育委員会

調査員　水島 和弘（菊川町教育委員会）

木佐森道弘（現大須賀町教育委員会）

調査補助員　石川 方己（町文化財審議委員）

鈴木 経雄（町文化財補助調査員）

八木 広尚（東海大学学生）

作業員　高岡 三郎　内藤 好夫　中村 清一　野中 政平

伊藤 喜一　磯部 薫　松村 光　井指 和彦

小倉 英雄　原田 尚　丹羽とみ江　福島さと子

三ッ井しの　福島 瑞枝　竹内 夏子　伊藤せつ子

野中 保子　杉山 花江　杉山つゆ子　横山みさを

堀内 初代　山崎 保世　内田やすえ　成瀬ふで子

吉野かつ子　三倉 やぎ　山口やす江　伊藤 初恵

右川 愛子　内藤よしの

- 4 本書の執筆は、島田冬史（立正大学大学院生）と水島が行い、分担は目次に明記した。

- 5 本書に掲載した石器の実測・清書は費元洋氏に、土器実測及びすべての遺物の写真撮影は八木・島田・水島が行った。

- 6 本書の編集は水島があたった。

- 7 本調査および本書刊行に関する事務は菊川町教育委員会社会教育課が行った。

教　育　長　佐野 紋一

事　務　局　長　坂部 武

社会教育課長　宮城 幸男

社会教育文化振興係長　山内 均

担当者　水島 和弘

- 8 実測図・写真及び出土遺物は菊川町教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法及び経過	3
方 法	3
経 過	4
第2章 歴史・地理的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の概要	8
第1節 層 位	8
第2節 遺 構	10
第1項 繩文時代の遺構（島田冬史）	10
第2項 弥生時代以降の遺構	12
第3節 遺 物	22
第1項 繩文土器（島田冬史）	22
第2項 石 器	36
第3項 弥生時代以降の遺物	43
第4章 考察とまとめ	45
第1節 繩文早期の土器について（島田冬史）	45
第2節 弥生時代以降の堅穴住居跡について	48
おわりに	49

挿 図 目 次

- 第1図 位置の地形図 (1 : 2,500)
第2図 グリット配置図
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 10,000)
第4図 1号集石土坑実測図
第5図 包含層中疊分布図
第6図 全体図
第7図 SB-1・2実測図 (S = 1 : 60)
第8図 SB-3・7実測図 (S = 1 : 60)
第9図 SB-4・5実測図 (S = 1 : 60)
第10図 SB-6・12実測図 (S = 1 : 60)
第11図 SB-8・9実測図 (S = 1 : 60)
第12図 SB-10・11実測図 (S = 1 : 60)
第13図 SK-1~3、SD-1実測図 (S = 1 : 60)
第14図 1号集石土坑出土土器拓影図
第15図 包含層出土土器拓影図 1
第16図 包含層出土土器拓影図 2
第17図 包含層出土土器拓影図 3
第18図 包含層出土土器拓影図 4
第19図 包含層出土土器拓影図 5
第20図 出土石器実測図 1
第21図 出土石器実測図 2
第22図 弥生時代以降出土遺物実測図

挿 表 目 次

- 表 1 包含層グリッド別出土土器点数表
表 2 1号集石土坑出土土器一覧表
表 3 包含層出土土器一覧表 1
表 4 包含層出土土器一覧表 2
表 5 包含層出土土器一覧表 3
表 6 出土土器一覧表
表 7 出土剥片類一覧表

- 表 8 出土剥片類石材構成比
 表 9 包含層グリッド別出土石器点数表
 表 10 包含層グリッド別出土剥片類点数表
 表 11 石材別剥片類長軸短軸相関グラフ

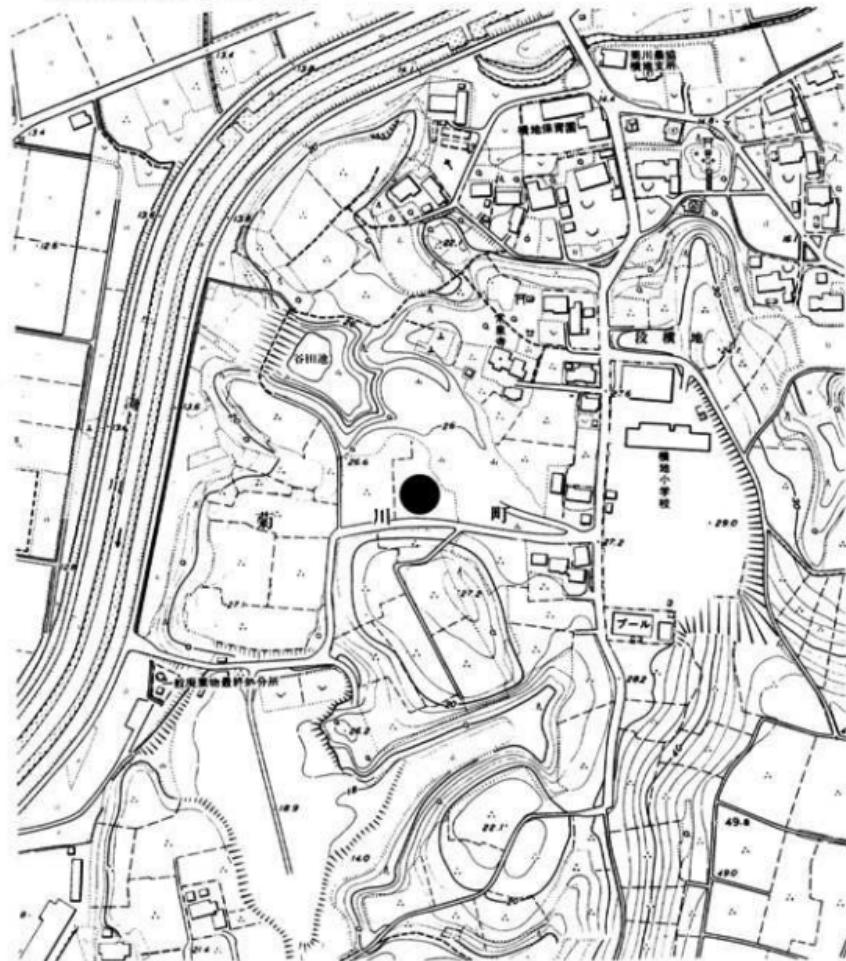
写 真 図 版

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 図版 1 遠景写真（北より）
上面完掘状態（航空写真） | 図版10 SK-2 完掘（東より）
SK-1 完掘（南より） |
| 図版 2 下面完掘状態（航空写真）
SB-1 完掘（東より） | 図版11 碓分布状態（南より）
碓分布状態（西より） |
| 図版 3 SB-2 内遺物出土状態（北より）
SB-2 完掘（北より） | 図版12 碓分布状態（北より）
碓分布状態（西より） |
| 図版 4 SB-3・7 完掘（西より）
SB-3・7 完掘（北より） | 図版13 1号集石土坑（西より）
1号集石土坑完掘（西） |
| 図版 5 SB-4 完掘（西より）
SB-5 完掘（北西より） | 図版14 出土遺物（縄文1）
図版15 出土遺物（縄文2） |
| 図版 6 SB-6 完掘（東より）
SB-6 内炉跡（西より） | 図版16 出土遺物（縄文3）
図版17 出土遺物（石器1） |
| 図版 7 SB-1（東より）
SB-1・6 完掘（東より） | 図版18 出土遺物（石器2）
図版19 出土遺物（弥生1） |
| 図版 8 SB-8 完掘（北西より）
SB-10（西より） | 図版20 出土遺物（弥生2） |
| 図版 9 SB-11 完掘（西より）
SD-1 完掘（北より） | |

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過（第1図）

菊川町は総面積63km²で小笠郡の東部に位置する。町の東は牧之原台地で榛原郡と接し、北は粟ヶ岳、西は小笠連山に囲繞されている。また町内のほぼ中央にJR東海菊川駅と東名高速道路菊川インターチェンジがあり交通の要所となっており、更に東遠地域の玄関口となっている。



第1図 位置の地形図 (1:2,500)

時間／年と長く、冬季の西風（遠州のからつ風）を除けば最高の気候条件を備えている。また、農業生産にも好適な気候であり茶栽培が盛んである。町内には茶園が約1,300haあり全農家所得の60%を占めている。県内有数の茶産地として名高い。昭和46年の農業の構造改善と工業化を目的とし農村地域工業導入促進法が施行されたことにより、半濟農工地域（555,100m²）、西方農工地域（723,000m²）、横地地区（875,000m²）の3ヶ所が農村工業導入地区に指定された。しかし当初（昭和48年）石油危機がもたらした日本経済の停滞が起因し進出する企業はしばらく見られなかった。ところが昭和53年以降、急激に企業進出が果され飛躍的な工業化が進んだ。一方人口も昭和50年代に25,000人であったのが、昭和55年には2,000人増加し、現在28,000人、世帯数6,900戸を数えるに至った。県下の町村の中では人口が三番目に多い町となった。人口の増加は『人口の社会動態』によると昭和52年まで転入者より転出者が多い傾向にあったが、昭和53年以降一転し、転入者が増加している。また『産業別就業人口』によると昭和50年代には農業者が全体の3分の1を占めていたが、昭和60年代に4分の1に減少し、第一次産業から第三次産業まで平均化している。つまり、農村地域工業導入の政策が実りつつあると言えよう。反面人口の増加によって住宅問題がクローズアップされた。そこで、青葉台に県営住宅・雇用促進住宅、下本所に雇用促進住宅が建設された。しかし、それでも住宅不足は解消されなかつた。昭和61年春には横地地区内にも雇用促進住宅を建設しようとする計画が起つた。横地地区は農業中心の地域であり、昭和35年以降人口2,000人のままで、変化なく人口密度も低い地域であった。そのため雇用促進住宅の建設によって、住宅不足の解消とこの地域の活性化を計ることを目的とし、横地地区が選定された。

東横地地内には、縄文時代の久保之谷遺跡をはじめ多くの文化財が丘陵上に分布している。この地域は、菊川町でも著名な遺跡が分布する場所である。ところが建設予定地内は、菊川町遺跡分布図（1982年）によると遺跡は認められなかつた。しかし、周辺の歴史的・地理的環境から推測し文化財が包蔵している可能性があるため、菊川町商工課と協議し建設予定地内の確認調査を行うことになった。昭和61年8月上旬確認調査を行つた。その結果、弥生時代の住居跡と縄文時代の上器が発見され埋蔵文化財の遺跡の存在が明らかになつた。このため、工事着手前に現地調査を行うことになった。現地調査は、県教育委員会の指導のもとで菊川町教育委員会が主体となり実施した。

参考文献

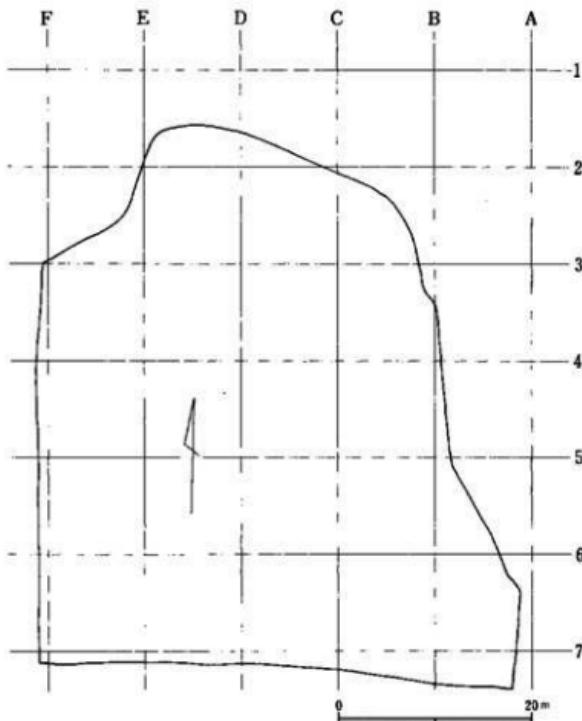
- | | | |
|-----------|------|-----------|
| 菊川町教育委員会 | 1982 | 菊川町遺跡地図 |
| 菊川町史編纂委員会 | 1985 | 菊川町三十年の歩み |
| 菊川町役場 | 1987 | 菊川町の統計 |

第2節 調査の方法及び経過

方 法（第2図）

調査は2,000m²を対象とした。調査区内を1m方眼のグリッドに区切り、このグリッドを基準に発掘調査を実施した。各グリッドは、東西方向をA～Fとして、南北方向を北より1～8として設定した。そしてグリッド名は、アルファベットと数字の組合せにより呼ぶこととし、北東の交点をそのグリッド名に代表させた。基軸の方位は、A地区ではN-0°44'00"-Wである。

現地での作成図は基本的に縮尺20分の1を原則として必要に応じて縮尺10分の1を行った。標高測量については、発掘区のE7ポイントの南で、道路の北側コーナーのところに仮BM(26.736m)を設定し、基準とした。調査に伴う写真撮影は、35mm判カメラと6×7判カメラを用いて、白黒フィルム及びリバーサルフィルムを使用した。



第2図 グリッド配置図

経過

昭和61年8月20日～25日 機械による調査内の表土除去を行う。

26日 発掘器材を搬入し現地調査を開始する。
まず、杭打ちを行い調査区を設定する。

27日～29日 調査区の西側より人力による荒掘り、精査作業を行う。

9月1日～6日 E・F4～7区内の精査作業を行う。溝1ヶ所、土壤2ヶ所、不明穴1ヶ所検出した。
これらの遺構を写真撮影し、そして計測した。

8日 横地小学校6年生40名が体験学習を行う。

9日～12日 Dラインより東側の遺構検出を行う。その結果、SB-2～5・7を検出した。一方E F4～7区の全体図を作成する。

13日～17日 D2区の遺構検出を完了する。SB-1・6・8・12の4ヶ所を検出した。SB-2～5・7を完掘する。

18日～22日 SB-1・6・8・12の土器の計測、写真撮影、遺物の取り上げをおこなった。

23日 上面（弥生時代以降）の遺構を完掘し、空中撮影を行う。
その後、各遺構ごとに完掘写真撮影を行う。

24日～27日 上面の全体図を20分の1で作成したのち、さらに下層へと調査を進めた。



作業風景



作業風景



体験学習

29日～10月2日 全体の精査作業は完了し、C4～6、D4～6区内より縄文時代早期の集石土坑を検出した。

3日～4日 C4～6、D4～6区内の遺物出土状態の写真撮影をしたのち計測、遺物の取り上げを行ない完掘する。

5日 下面（縄文時代）の構造を完掘し、空中撮影を行なう。

6日 各地区の完掘状態の写真撮影を行なったのち、発掘資材の撤収を行ない現地調査をすべて完了した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

東横地西原遺跡は、菊川駅より約10km程南へ行ったところにある東横地の部落の南の小高い河岸段丘上に立地している。東横地は、東に牧之原台地が広がり北には、牛渕川によって形成された冲積地が広がるといった地理的景観をなしている。牧之原台地は、大井川下流と菊川の間に位置する。大井川右岸に広がる洪積台地で、同川の氾濫原が隆起して形成されたものである。この台地は、北から南へ緩やかに傾斜しており北端部の台地面で標高約250mを示し、小笠町高橋原で約150mとなる。また、牧ノ原台地から西へ向かって河岸段丘が発達しており、そのひとつに当遺跡が立地する段丘がある。段丘は、小笠町丹野から三沢・東横地に延びる東西に細長い地形となっており、標高50m前後と低い。菊川によって形成された段丘は、数段の段丘で構成されている。これらの各段丘は規模や特徴の上から4群にわけられる。

- I段丘 標高60mの高位面のもので小笠赤峰原から猿田谷原に至るもの。
- II段丘 段丘中最も規模の大きな面で、興嶽寺から西へ広がる興嶽寺原周辺のもの。標高は50mである。
- III段丘 東横地の段屋敷から横地小学校を経て久保之谷原に至る範囲で、標高30m程のもの。
- IV段丘 谷田池周辺と久保之谷池の南西の標高20～25m前後の面である。最も下位面にあたり縁辺部は顯著に河川によって浸食されている。

東横地西原遺跡はこのIV段丘上に立地している。菊川町は、比較的河岸段丘が発達した地域である。町内の河岸段丘は、大庭正八氏（1968年）により、かって規模や連続性から5群に分類された。その分類は、今回分類した段丘の名称の、I段丘=3段丘、II段丘=4段丘、III・IV段丘=5段丘に対比される。これらの各段丘の名称がそれぞれの時代の菊川の谷筋をあらわしているもので、段丘の発達史が菊川の流路変遷を知る手がかりとなっている。

菊川流域を形成する最も古い地層は、最上流部に分布する古第三紀の瀬戸川層群で

ある。この地質は、瀬戸川層群を本流の基盤として、上位に新第三紀系（注1）の大井川層群、三笠層群、相良層群、掛川層群が順に累重している。さらに、第四紀の堆積物である小笠山疊層、牧之原疊層そして沖積層がこれをおおっている。菊川流域には、以上のような第三紀から第四紀にかけての地層が連続し、しかも広く分布している。（1983年）

遺跡周辺の地質は、第三紀層の掛川層群からなる。掛川層群は堀之内互層・満水泥岩層・神谷城疊岩層に分けられ、当地域は堀之内互層に含まれる。この地層は、青灰色の砂岩と泥岩の互層で非常に軟質な岩石である。第三紀層の上面には、段丘疊層が不整合にのっている。段丘疊層は、上部が黒ボク土壌と黄褐色粘土質の層から成り厚さ1～2mを測る。下部は、砂岩疊を主体とした層となる。

注1 地質年代は大きく古生代、中生代、新生代に分けられ、このうち約7,000万年に始まる新生代は約200万年前を境に第三紀と第四紀に分けられる。第三紀は細かく暁新世・始新世・斬新世・中新世・鮮新世の5つに時期区分され、前半の3つを古第三紀、後半の2つを新第三紀という。日本列島が現在に近い陸地を形成したのは中新世後期で、大八洲造山運動と呼ばれる造山運動によるものである。この運動は第三紀末まで続き、山地を形成するとともに、広く砂疊層を堆積させた。第四紀は更新世と完新世に分れる。更新世は寒冷な氷期と温暖な間氷期が繰り返された時代で別名洪積世ともいう。この時期以降現代までを完新世（沖積世）という。（豊橋市1988年）

第2節 歴史的環境（第3図）

横地地区を中心に遺跡の分布を概観してみたい。

遺跡の多くは、段丘上に分布している。特に東横地から赤峰に延びる段丘は遺跡の宝庫となっている。各段丘の遺跡は以下のとおりである。

- I 段丘 猿田谷遺跡（縄文時代早期・中期・弥生時代後期・鎌倉時代）
- II 段丘 興嶽寺原遺跡（縄文時代中期）、三沢西原遺跡（旧石器時代、縄文時代早期～中期、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代）
- III 段丘 段屋敷遺跡（縄文時代早期末、弥生時代後期、平安時代）、御屋敷遺跡（弥生時代後期～古墳時代前期、奈良時代～平安時代）、段横地古墳、久保之谷遺跡（縄文時代早期・中期・弥生時代後期、平安時代）、前山遺跡（縄文時代中期）、山王裏遺跡（縄文時代）
- IV 段丘 東横地西原遺跡（縄文時代早期・弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代～鎌倉時代）

これらの段丘には、縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡が多く存在している。



第3図 遺跡の位置と周辺の道路 (1 : 10,000)

縄文時代には早期と中期の時期に遺跡が多い。特に昭和59年に発掘調査された三沢西原遺跡から早期の住居跡が発見された。また、最下層から旧石器時代の礫群とナイフ形石器が出土し、菊川町では最古の遺跡となった。

弥生時代には、椎ヶ下遺跡など沖積地にも多く遺跡が分布している。椎ヶ下遺跡は1973年牛渕川の河川改修に伴い調査された。その結果、弥生時代後期前半から古墳時代前期の遺跡であることが明らかになった。段丘には、後期後半以前の遺跡は認められておらず、後期後半から段丘一帯が生活の場となったと言えよう。このような特徴は、高田ヶ原丘陵をはじめ菊川流域にも認められる。

古墳時代から奈良時代にかけては、御屋敷遺跡の1ヶ所が確認されているだけである。しかし、沖積地には田中遺跡や芝原遺跡などが分布している。また、横穴や古墳が築造されるのは段丘上であり、段丘上が墓域とされている。

第3章 調査の概要

第1節 層位

今回の調査によって以下5層を識別することができた。

- | | |
|------|-----------|
| I層 | 表土 |
| II層 | 黒褐色粘質土層 |
| III層 | 灰黄褐色粘質土層 |
| IV層 | 黄褐色粘質土層 |
| V層 | 明黄灰褐色砂質土層 |

I層は耕作土となっている。この層は、機械による茶園改植によって深さ約50cmほどは、攪乱を受けている。II層は、黒ボクと呼ばれる土で厚さ30~40cmを測る。この層の上面は耕作によって攪乱されており、本来厚さ50~60cmであったと推測される。また、弥生時代以降の包含層となっている。III層は縄文時代の遺物包含層である。土層は薄く北側へ移るほど希薄となり3ラインより北では完全に消滅する。IV層は縄文時代の生活面である。この層は、層位中一番厚く安定して堆積している。土は、小粒な砂利を含み粘質が強い。V層は、礫混じりの砂利層で洪積世の河成礫層と思われる。

これらの層位は、三沢西原遺跡の層位と対比するとI層からIV層までは同位層となっているがV層は、三沢西原遺跡ではIV層となっている。これはV層が三沢西原遺跡では旧石器時代の生活面であり今回の調査ではこの時期を示す遺物・遺構は認められておらず層位的にも検出されなかった。遺跡は丘陵の北側縁辺部にあたり、西側は小さな谷となっている。このため西側に向って緩やかに傾斜している。各時代の生活面では、平坦な地形となっている。



第4図 全 体 図

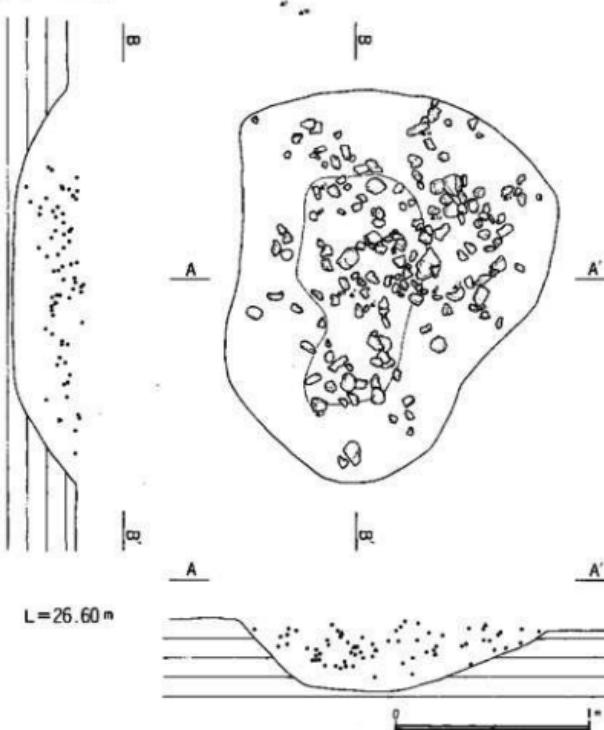
第2節 遺構

第1項 縄文時代の遺構（第5図・第6図）

東横地西原遺跡からは縄文時代早期の遺物・遺構が検出されている。縄文時代の遺構については1号集石土坑と名付けたものその他特に住居跡等は見つかっていない。遺物は包含層より検出され、包含層中に廃棄と考えられる礫の分布が見られる。以下にこれらの遺構について述べていく。

1号集石土坑（第5図）

D6グリットから集石土坑が1基検出された。長軸径200cm・短軸径162cmを計るやや不整形の掘方を持ち、深さ35cmと浅い皿型の底面構造を呈する。約160個の礫が土坑内部より検出されている。用礫は10cm内外の拳大のものが多く、平均して同じくらいの大きさである。礫の垂直分布を見ると土坑底部から上5~10cmの範囲にはほとんど無く、それより上のレベルにまとまって分布している。多くのものが被熱し赤色を呈する。出土遺物としては土坑内部から14点、土坑付近に2点の土器が検出されている。土坑内部より検出された土器は、土坑中央部分にややかたまるような平面分布を示しており、垂直分布は土坑底部から20cm程上の部分に平均して分布しているようである。土



第5図 1号集石土坑実測図



第6图 包含层中碳分布图

器は細片が多く器形を窺えるものはなかった。土器について詳しくは遺物の項で述べてあるのでそちらを参照してほしいが、時期的には1片のみI群土器がある他はみなII群土器であり、この集石土坑の構築時期はII群土器と同じとみなし得る。なお第5図中にある三角形のマークが土器であり、数字は第14図の土器図版の中の番号と同じである。

従来よりこの種の土坑は「集石造構」や「集石土坑」・「焼礫集積造構」等と称され中部・関東諸地域でかなりの数の類例が見つかっており、時期的にも縄文時代早期から後期または晩期あたりまで連続と継続する遺構である。その性格については調理施設説と祭祀・埋葬といった特殊用途説がある。本遺跡の集石土坑では土坑内部や周囲からカーボン粒子が検出されており、礫の被熱を考え併せて、従来より言われている「蒸焼き料理などを行った調理施設」の公算が大きい。

包含層中の礫分布（第6図）

さきに少し述べたように本遺跡では早期の包含層が検出されている。包含層はB3グリット・B6グリット、E3グリット・E6グリットの範囲内で、その中に遺物が分布している。中でも1号集石土坑のあるD6グリットとD5グリットには礫が集中的に分布している（第6図）。この礫分布は意識的なものというよりは廃棄や集石土坑の破壊に伴うものであるとみられ、検出できた1号集石土坑以外にも集石土坑が作られていたのであろう。

第2項 弥生時代以降の遺構（第4図）

竪穴住居跡（SB）12基、土壙（SK）3ヶ所、溝状造構（SD）1ヶ所、不明遺構（SX）1ヶ所、小穴が検出した。遺構は、機械による天地返しによって削平されおりプランの検出は非常に難しかった。では各遺構ごとに記述する。

SB-1（第7図） D2区内西側の縁辺部に位置する。住居跡の北壁側は、掘り方が検出されなかった。残存する部分より平面形は円形である。規模は、東西3.86mを測るが南北は不明である。現況で壁の高さは12cmである。床は貼床で厚さ4cmを測る。柱穴は各コーナーの内側に位置し、柱穴間は東西2.1m×南北1.7mを測る。各柱穴の平面形は円形を呈し、大きさは径30~40cm程度で、床面からの深さは20cmで垂直に掘り込んでいる。一方南隅の柱穴は深さ60cmを測る。南壁側に副柱が2ヶ所検出された。規模は径15~20cm、床面からの深さ25cmを測り、間口は20cmと隣接している。これらの特徴からおそらく住居の入口部分に付随する遺構と考えられる。壁溝は残存部分では、幅15~20cm、床面からの深さは6cm程度で巡っている。炉と思われる焼上は住居跡のやや北側から検出された。範囲は50×60cm、厚さ8cmで赤褐色に良く焼けている。覆土は黒褐色である。遺物は覆土内より弥生時代の甕（1）が出土している。

SB-2 (第7図) 調査区内のほぼ中央のDライン上に位置する。今回の調査で検出した住居跡の中では残存の良いものである。平面形は、南東隅が不整形となっているが、隅丸方形を呈す。規模は、東西3.36m×南北3.16mを測る。壁の高さは、検出面より深さ10cmである。床は厚さ4cmの貼床となっている。柱穴はやや中央に4ヶ所検出された。柱穴間は、東西0.96m×南北1.08mを測る。各柱穴の平面形は円形を呈し、大きさは径30cm、床面からの深さは10cmと浅い。壁溝は南壁側に認められ幅40cmで床面からの深さは6cmを測る。炉は検出されなかった。覆土はⅡ層である。遺物は、床面より壺(2)をはじめ土器(3~5)が出土している。

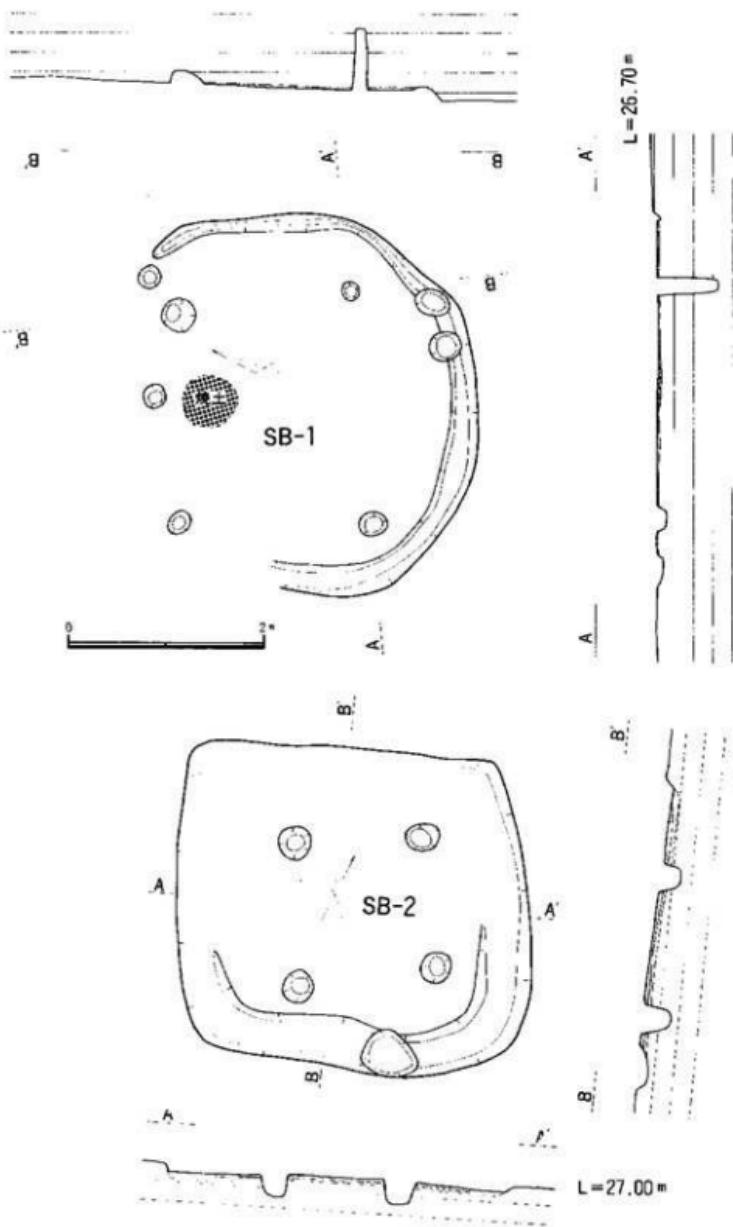
SB-3 (第8図) SB-4に隣接するものでB-C4区に位置する。大半が削平されており、わずかに痕跡を留める壁溝と柱穴によって住居跡と確認されたものである。また、住居跡の東壁側が大溝とSB-7によって削平されている。規模は、東西6.4m×南北7.3mと南北方向にやや広い隅丸方形を呈するもので今回の調査では最も大きい。床は貼床である。柱穴は3ヶ所確認された。柱穴間は東西3.1m×3.5mを測る。各柱穴の平面形は円形を呈し、大きさ径30~40cmで床面からの深さ25cmである。壁溝は幅20cmで床面からの深さは8cmを測る。覆土はⅡ層である。山上遺物は土器(6~14)が出土している。

SB-4 (第9図) B3区に位置する。住居跡の半分近くが大溝によって削平されている。平面形は残存する部分から方形に近い隅丸方形で、南北3.97cmの規模をもつ。壁の高さは20cmを測る。柱穴は3ヶ所確認された。柱穴間は、東西2.2m×南北2.1mと等間隔である。各柱穴の平面形は円形を呈し、大きさ径25cmで床面からの深さ30cmで垂直に掘り込んでいる。壁溝と炉跡は検出されなかった。遺物は認められなかった。

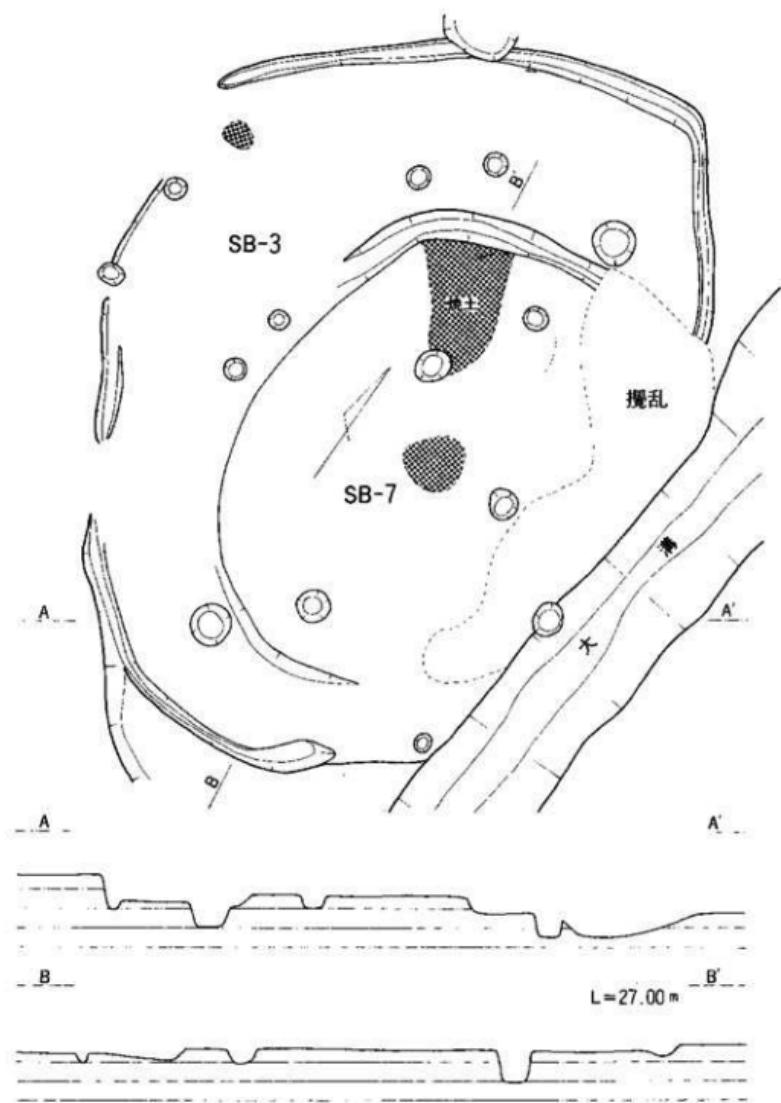
SB-5 (第9図) C2・3区に位置する。平面形は後世の耕作による搅乱によって大半が削平されており残存する部分から隅丸方形であると推定されるが規模については不明である。壁の高さは比較的遺存状態の良い所で10cmを測る。柱穴は7ヶ所検出したがどれがこの住居のものか判断できなかった。

SB-6 (第10図) SB-1に隣接するものでD2区に位置する。住居跡は丘陵の縁辺部に立地し西側を溝により削られている。平面形は方形と推定される。規模は、南北4.06cmを測る。壁の高さは10cmである。覆土は黒褐色土である。柱穴は3ヶ所確認された。柱穴間は、東西2.3m×南北2.0mを測る。各柱穴の平面形は円形を呈し、大きさ径30~40cmで床面からの深さ20~30cmである。壁溝は幅25~30cm、床面からの深さは10cmほどで巡っている。遺物は壺(15)・高杯(16)などの器種の土器が出している。

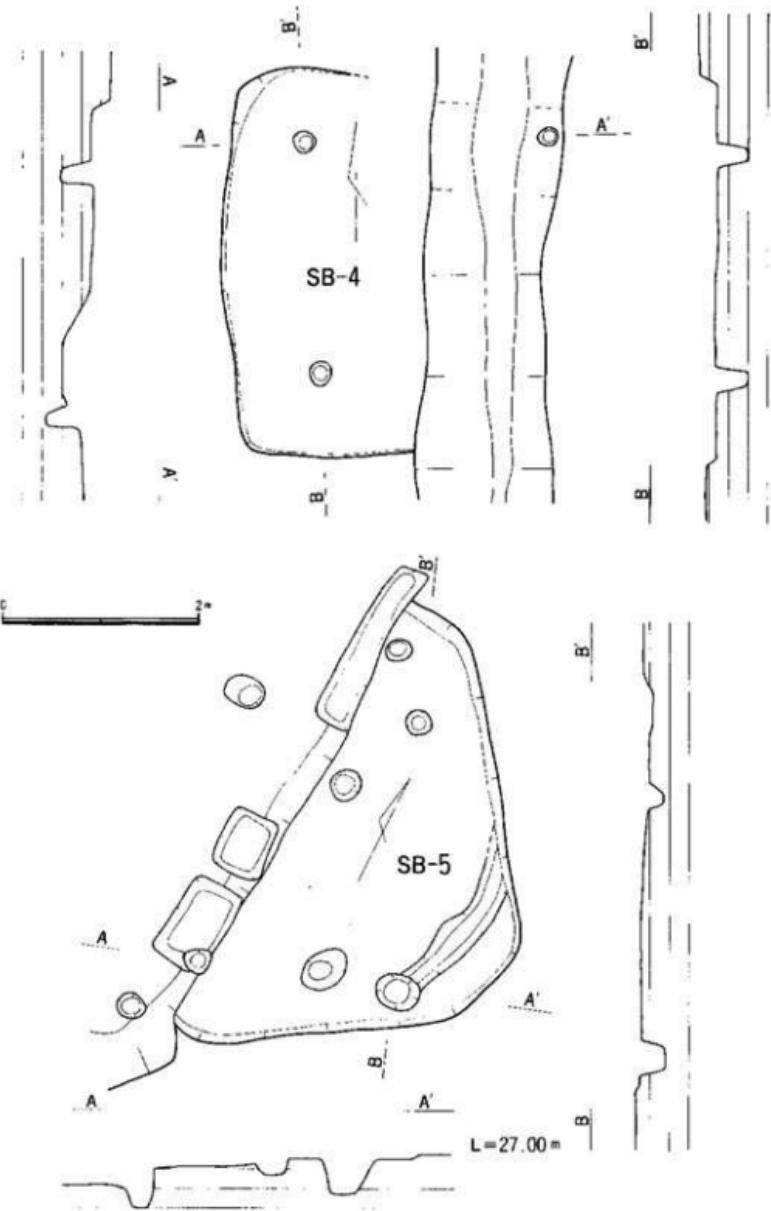
SB-7 (第8図) B4区に位置し、SB-3と切り合っている。住居跡の東側は後世の耕作の搅乱によって削られている。平面形は残存部分が少ないが隅丸方形と



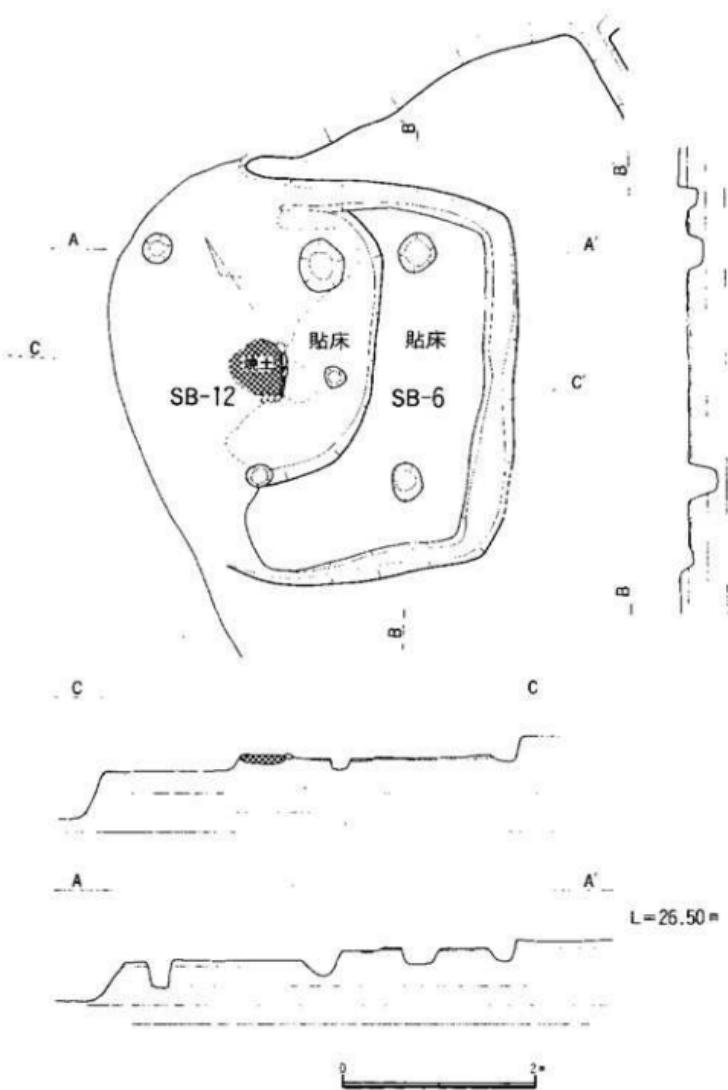
第7図 SB-1・2実測図



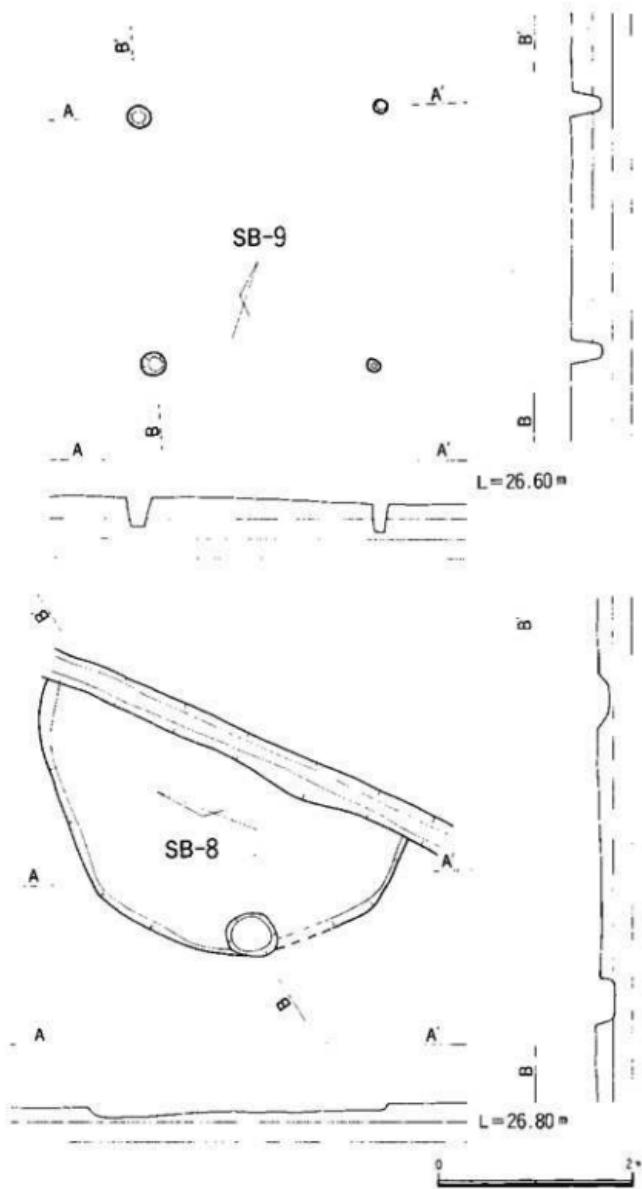
第8図 SB-3・7実測図



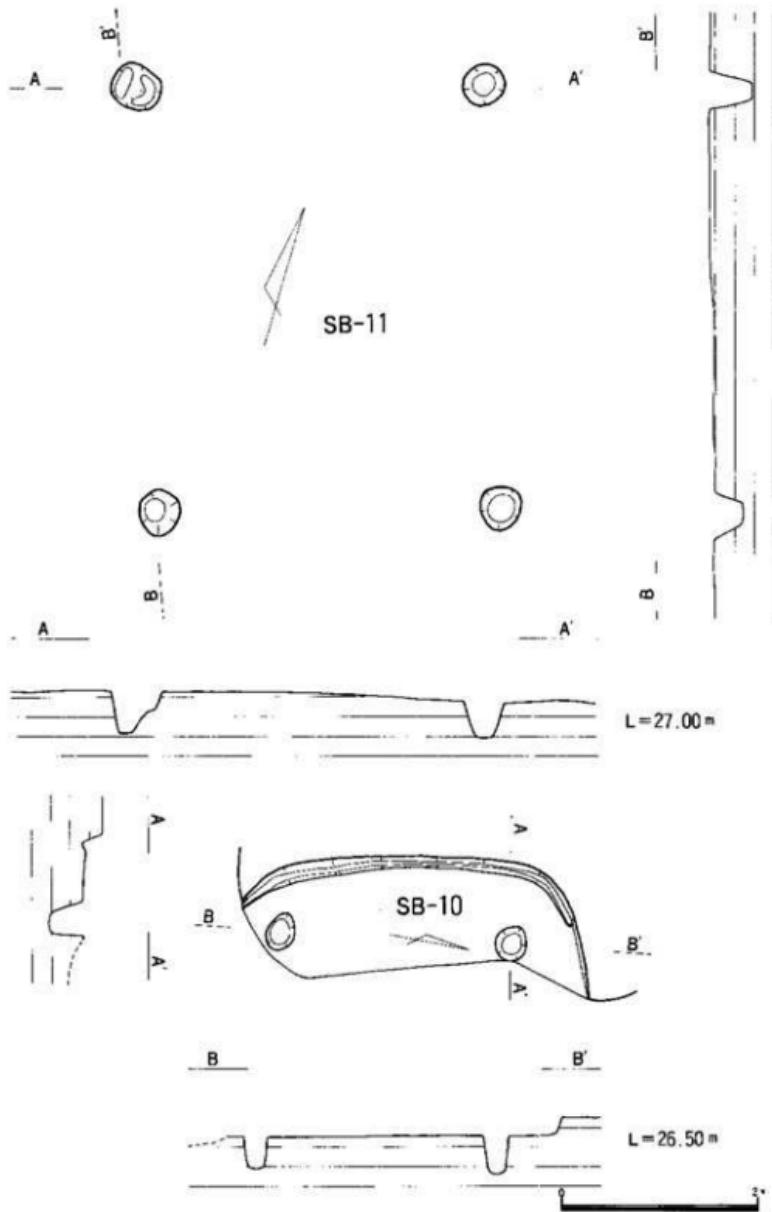
第9図 SB-4・5実測図



第10図 SB-6 · 12実測図



第11図 SB-8・9実測図



第12図 SB-10・11実測図

推定される。規模は南北4.7mを測るが東西は不明である。覆土は黒褐色土で炭化物を含んでいる。柱穴は2ヶ所確認された。柱穴間は南北2.5mを測り、平面形は円形である。大きさは径30cmで床面からの深さ15~30cmである。壁溝は幅30cmで床面からの深さは4cmを測る。炉と思われる焼上は、柱穴の北西側に1ヶ所検出した。大きさは63×54cm、厚さ6cmで赤褐色に良く焼けている。遺物は弥生土器が出土している。

SB-8 (第11図) SB-1の東に隣接するものでD2区に位置する。住居跡の西側半分が検出されたが、その他は耕作によって削平されている。又確認された壁面は断片的にわずかに残っていただけである。規模や平面形は不明である。遺物は認められなかった。

SB-9 (第11図) B7ポイント周辺に位置する。下面調査の時柱穴によって住居跡と確認されたものである。掘り込みは、茶園改植によって搅乱されている。柱穴は4ヶ所検出された。柱穴間は東西2.3m×2.3mを測る。各柱穴は円形で、大きさは北・東側が径15cmと小さく南・西側は径25cmである。また、床面からの深さは約30cmを測る。覆土はII層である。

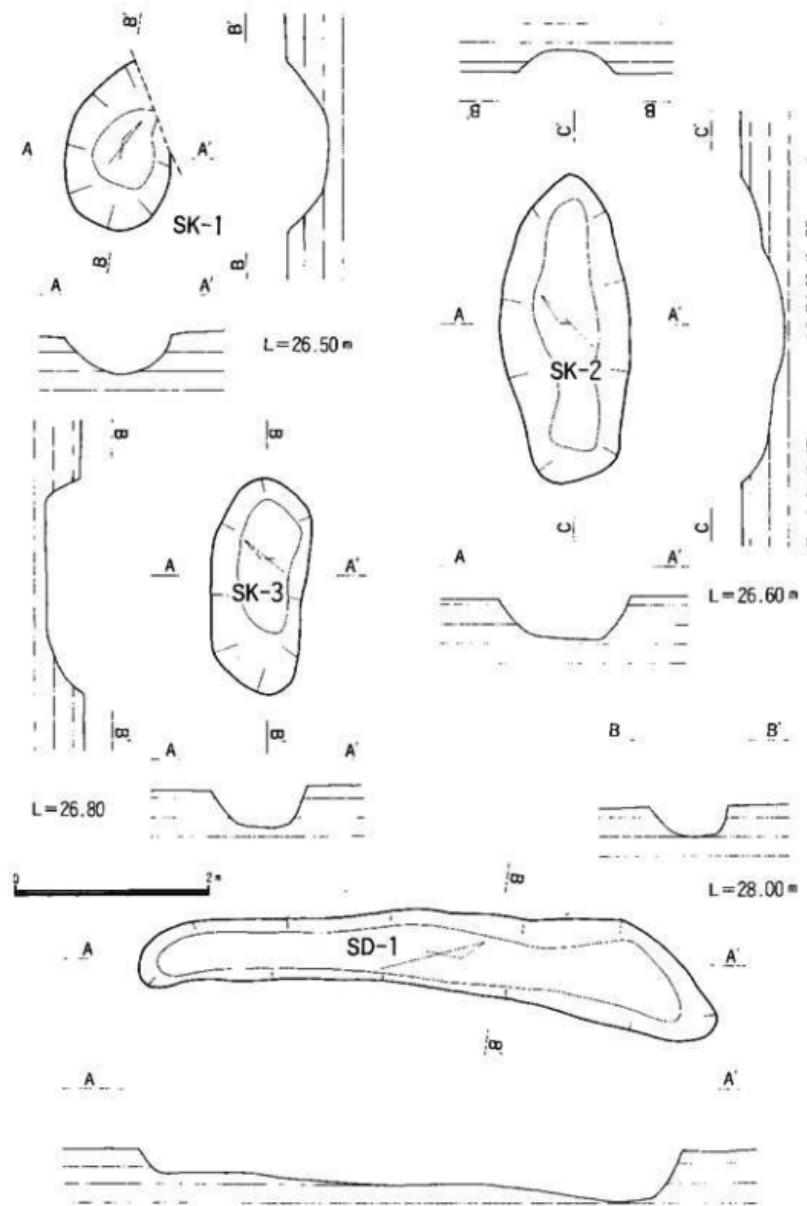
SB-10 (第12図) SB-9の北で、丘陵の縁辺部A6区内に位置する。やはり削平されている所が多く、住居跡の西側が残存するだけである。平面形は壁溝より推定し隅丸方形と考えられる。壁の高さは15cmを測る。柱穴は2ヶ所検出された。柱穴間は2.2mを測る。各柱穴の平面形は丸く、大きさは径25cmで床面からの深さ30cmを測る。覆土はII層である。遺物は上師器片が数点出土している。

SB-11 (第12図) B・C6区に位置する。SB-9と同じく下面調査の時検出されたもので、柱穴の並びから住居跡と認定したものである。住居跡は削平による搅乱によって掘り込みは削られているが4本柱からなる。各柱穴は、大きさは直径40cmと他の住居跡の柱に比較しやや大きいもので、検出面からの深さ40~50cmを測る。柱穴間は東西3.0m×南北3.9mと南北に広がっている。覆土は黒褐色土である。遺物は認められなかった。

SK-1 (第13図) D3区内の西側に位置する。東側の一部は後世の耕作によつて削られているが、残存する部分より平面形は椭円形と推定される。規模は長径1.75m×短径1.1m、深さ55cmを測る。底は丸く断面船底形を呈す。覆土は2層からなり、上層から暗黒褐色砂質土、暗黒褐色粘質土である。遺物は認められなかった。

SK-2 (第13図) D6区内に位置する。平面形は溝状に長い椭円形で、長軸3.1m×短軸1.2m、深さ45cmの規模をもつ。底は平らである。覆土は黒褐色である。遺物は摩滅した土師器が出土している。

SK-3 (第13図) D3区内に位置する。平面形は不整椭円形で、長軸2.2m×短軸1.0m、深さは40cmの規模をもつ。覆土は黒褐色で、上層部より焼石が出土している。遺物は認められなかった。



第13図 SK-1~3, SD-1実測図

SD-1 (第13図) E 6 区内の SK-2 の西に位置する。規模は長さ5.6m、幅80cmを測る。溝はやや曲線を描き延びている。底は平で、北に少し傾斜している。覆土は黒褐色土である。遺物は弥生土器片が出土している。

大溝 (第4図) 調査区の東側と北側の縁辺部に溝が検出された。東側の溝はB 2区から掘り込まれ南北に直線に延びB 5区内で消滅する。規模は幅1.5m、深さ50cmを測る。溝は北から南に向って傾斜している。覆土は黒褐色土である。遺物は底より弥生土器が出上している。北側の溝は2重に巡るものである。溝の規模は内側では幅40cm、深さ30cm、外側では幅40cm深さ40cmを測る。内側の溝はSB-12の付近で…ケ所外側の溝と結んでいる。これは、水の流路の関係であろう。覆土は黒褐色土である。遺物は認められなかった。

SX-1 (第4図) E・F 4 区に位置する。溝状遺構に近い遺構であるが、平面形が不整形であるため不明遺構とした。大きさは、長さ4mを測る。底部は2段からなり、南側から北に向って低くなっている。覆土は基本的にⅡ層からなる。出土遺物は認められなかった。

第3節 遺 物

第1項 繩文土器 (第14図～第19図・表1～表5)

東横地西原遺跡からは百数十点ほどの繩文土器が検出された。土器は表1を見てわかるようにB 3・E 3～B 5・E 6 グリットの範囲内に分布しており、特にC 3・D 3～C 5・D 5の部分が土器分布の中心となっている。先に記したように上器分布域内のD 6 グリットを中心に疊が散布し、集石土坑が1基検出されている。この土器・疊の分布域が繩文時代の包含層範囲である。また疊の散布は集積土坑が破壊されたことによるものである可能性もあり、集石土坑は複数あったと考えられる。

繩文土器は先に述べた包含層出土のものと集石土坑出土のものがある。集石土坑出土の土器は16片にすぎず大部分は包含層出土のも

E	D	C	B	
1	9	18	4	3
1	11	13	2	4
1	12	25	3	5
4	3	1		6

表1 グリット別出土土器点数表

のである。そこで縄文土器の分類に当たっては包含層出土・集石土坑出土の両者を合わせて分類し、分類基準をつくった。

まず土器型式に基づいて以下のように大分類した。

I群土器 茅山下層式土器と考えられるもの。

II群土器 茅山下層式土器に後続すると考えられるもので、茅山下層式直後で柏烟式との間に属すると思われるものである。

III群土器 上記以外の土器ということで柏烟式土器に属するもの1片と不明の土器1片をここに含めた。

またこの内部を文様により小分類したが、II群土器に較べてI・III群土器は出土量が少なく、別個に小分類を行うと煩雑になるためあえてII群土器を基準に小分類を行い、他の群についてもこの小分類にあわせることにした。小分類は以下の通りである。

1類 刺突・列点文を主なる文様とするもの。

2類 凹線文を持つもの。

3類 爪形の刺突・列点をもつもの。

4類 脚部・頸部等のくびれ部に段をもつもの。

5類 条痕のみのもの。

6類 口縁部・底部の破片。

0類 上記の6分類に属さないもの。大部分が土器の状態が良くなく文様が不明のものである。

縄文土器は大分類の通り縄文時代早期後半に属し、胎土に纖維を含む条痕文系土器である。報告書登載土器はすべて表にして載せてあるが、いくつか代表的なものを選んで解説を加えてゆく。

I号集石土坑出土土器（第14図、表2）

I群土器が1片出土している他はみなII群土器である。1は凹線文がみられI群土器と考えられる。凹線文は浅めで沈線状というよりはなぞりのような状態を示す。胎土に纖維を含み焼成はやや良好である。4は表裏共に剥落がひどく文様等は判然としないが、剥落が少ない裏面をみると纖維束による条痕が施されている。この破片は胎土や焼成から考えて、1号集石土坑内から出土している2、並びに包含層出土の59と同一個体であろう。5は平底の底部である。表面は剥落のため条痕があるかどうか不

明であるが、裏面には纖維束条痕がある。6はやや内湾する口縁部片である。表面に纖維束によるとみられる擦痕があるが、刺突や列点文などは見られない。表面は丁寧に調整が施されている。胎土には纖維を多く含むが焼成はやや良好である。7も口縁部破片である。やや内湾し口縁下に段を作っている。段はなぞりによって作り出されたよう段に沿うように刺突が施されているようにもみられるが、土器表面の状態が悪く判然とはしない。内面には沈線状に輪積の調整痕が残っている。14は表裏、15は裏面が磨かれている。条痕を付けたあとに磨いたのか初めから磨き調整を行ったのかは不明である。

1号集石土坑出土土器は第14図に拓本を載せた16片であるが、4・6・7を除いては破片が細かく分かれにくく。先に述べたように大部分がⅡ群土器であり、文様等がよくわからないⅠ類土器がその半数を占める。遺物からみてI号集石土坑は、Ⅱ群土器の時期に構築されたものとみて良い。

包含層出土土器（第15図～第19図、表3～5）

包含層出土土器は先述したようにI・II・III群土器に分けられ、さらに7類に細分される。報告書登載土器はすべて表にしてあるが、群・類別にいくつかのものを見てゆく。

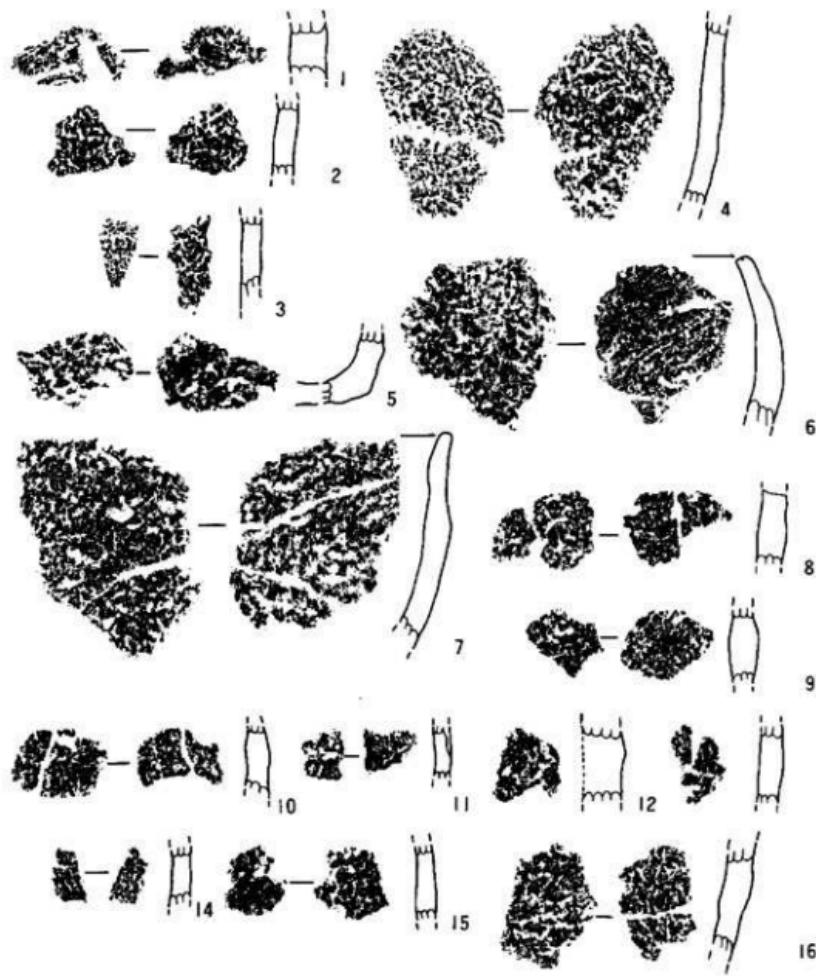
I群土器（第15図～29、表3）

茅山下層式土器と考えられる土器をI群とした。I群土器とII群土器を分類するに当たっては、基本的には器形が段の存在によって屈曲するものを茅山下層式と捉え、さらに凹線文によって文様が作られている点などを基準にしたが、それ以外は胎土や焼成からみて同一個体と考えられるものを含めた。

17は焼成が良く胎土の感じも1号集石土坑出土の1とよく似ている。19はなぞり状

番 号	性 別	種 別	同... 類体	表面色調		底色調 (cm)	寸 寸	人 物	地 理	表 面 文 様	裏 面 文 様	用 途
				底 色	面 色							
1	1	3	4	白	白	10	M 3	S 3	無	無	無	無
2	2	5	6	暗赤褐色	深赤褐色	4.5			無	無	無	無
3	3	6	7	暗	深褐色	5	M 2		無	無	無	無
4	4	3	8	暗赤褐色	深褐色	5	M 2		無	無	無	無
5	5	3	9	暗赤褐色	深褐色	7	M 2		無	無	無	無
6	6	3	10	赤褐色	明褐色	8	M 2	M 3	無	無	無	無
7	7	6	11	赤褐色	明褐色	8	M 2	M 3	無	無	無	無
8	8	6	12	赤褐色	明褐色	9	S 3		無	無	無	無
9	9	6	13	赤褐色	明褐色	9	S 3		無	無	無	無
10	10	6	14	赤褐色	明褐色	7.5	M 3		無	無	無	無
11	11	6	15	赤褐色	明褐色	8	M 3		沙質	無	無	無
12	12	6	16	赤褐色	明褐色	4			無	無	無	無
13	13	6	17	赤褐色	明褐色	14	M 1		無	無	無	無
14	14	6	18	赤褐色	明褐色	6.5	M 1	M 3	無	無	無	無
15	15	6	19	赤褐色	明褐色	6	M 1	M 3	無	無	無	無
16	16	6	20	赤褐色	明褐色	7	M 3	M 3	沙質	無	無	無

表2 1号集石土坑出土土器一覽表



第25圖 1號集石土坑出土土器拓影圖

の凹線文によって段が作られている。21から26までは同一個体である。胎土に纖維を含み焼成はやや良い。22は凹線下が段状になりその下に沈線が描かれる。沈線は21・23・26にもみられるが、22の沈線が斜位に描かれているのに対しこれらの破片では縦位の構成をとる。22の破片がおそらく1段目の段となり2段目の段以下に縦位沈線が施されるといった、茅山下層式の屈曲した器形構成を持つものであろう。28・29も段を持つ。28は段の直上に刺突が見られる。表面の状態が悪く連続刺突となるかどうか不明であるが、茅山下層式の特徴を示している。29は胴部の屈曲が緩やかでやや後出的な様相である。段部の断面形態が鋭角的である。あるいはⅡ群土器に含まれるかも知れない。

II群土器（第15図～第19図、表3～表5）

茅山下層式に後続するとみられるものである。茅山下層式の器形が段を有することによって屈曲するのに対し、II群土器はこの段が弱まってゆく段階である。文様は単純な列点文であるとみられるが、大部分の破片には文様がなく半数近くは文様等が不明な0類に属する。また表や文章には述べていないが全ての土器の胎土には纖維が含まれる。

1類（第15図-30～第16図-48）

刺突・列点文がつくものである。30は表面が剥落しているが横位列状の列点文がある。内部に輪積み調整によるらしい沈線がみられる。33は棒状工具によって横位の列点が押捺されている。押捺は浅く観察し難い。列点文は横位列状であり山形の文様構成をとるが、茅山下層式に見られるような列点文よりも単純な構成となる。胴部破片であるが段や屈曲等はみられない。37も同様に浅い列点があるが拓本では分かりにくい。39は土器裏面に横位一列に爪形文が施されている。45はやや屈曲がみられる破片であろう。表面に分かりにくく浅い列点があり、内面に貝殻条痕がある。46はかなり深い刺突文である。33よりさらに単純な横位列条となるようである。

2類（第16図-51, 52）

凹線文がみられるものである。51は拓本で明らかではないが横方向になぞりによる凹線文がある。52もなぞりによる凹線があるが判然とはしない。やや内傾することからI線部に近い部分の破片ではないかと思われる。ともに横位の凹線であるが浅く、凹線によって段が作られたり胴部が屈曲したりはしない。II群土器の中にこの類のものは少ない。

3類（第16図-49, 50）

爪形の刺突を持つものである。爪形の刺突（連続刺突）は柏畠式土器の主要文様であるが、II群土器には少ない。49は長さ1センチ程の棒状原体の連続刺突による。50はこれと同一個体であるかもしれない。爪形文は1つしか見られないが破片が細かいため、列状文様をとるであろう。

4類 (第16図-53, 54)

段・屈曲がみられるもので、これも2片しかない。54には段は見られないが、53と確実に同一個体であるため本類に分類しておいた。53ははっきりした段を持ちI群土器に含めても良いかもしれないが器形の屈曲はゆるやかである。表面の状態が極めて悪く段の上方に列点があるかどうかはわからない。

5類 (第16図-55～第18図-81)

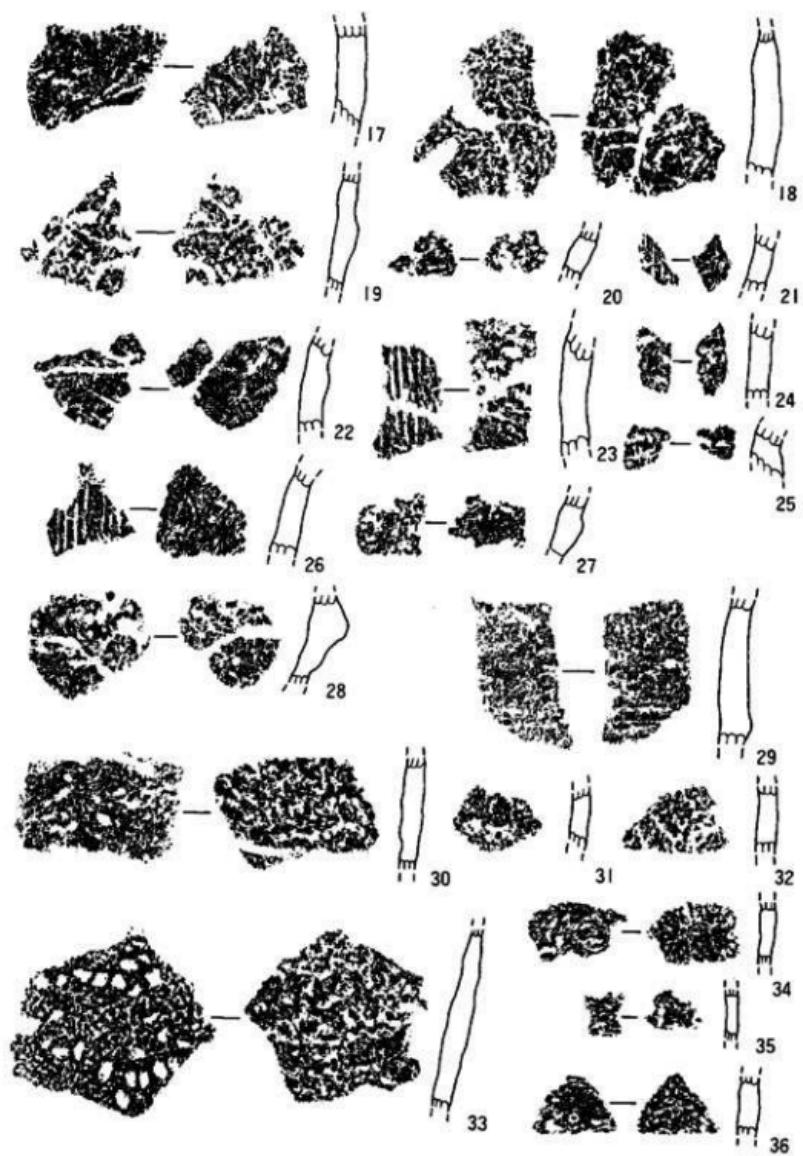
条痕のみが見られる破片である。条痕のみの土器の中にはI群に含められるものもあるであろうが区別する基準がないためすべてII群の中で考えておく。

57は器厚が薄く焼成の具合も他の土器とは異なっている。裏面に指頭痕の様なものが見られるがこれは土器制作時の調整痕であろう。58は貝殻条痕が明瞭で、破片上部に刺突のようなものがみられる。あるいは横位爪形文であるかも知れない。この破片の部位は頸部で口縁に向かって開く器形をとる。器形からみて茅山上層式であるかもしれない。60は裏面に斜位の条痕がみられる。焼成や胎土は33に似ているが同一個体かどうか判然としない。61は土器表面に縦位の貝殻条痕がみられ裏面に縦位に連続爪形文が施されている。爪形文の原体は人間の爪のようである。62は裏面にははっきりとした貝殻条痕がみられる。貝殻条痕は沈線文のように深くしっかり刻まれている。アナダラ属の貝殻縁によって削り取るようにして押捺したのである。67は57に似て薄く土器表面に調整のためと考えられる指頭痕がみられる。71は裏面は貝殻条痕であるが表面は織維束条痕であろう。75は表面に爪形列点のような文様が見られる。

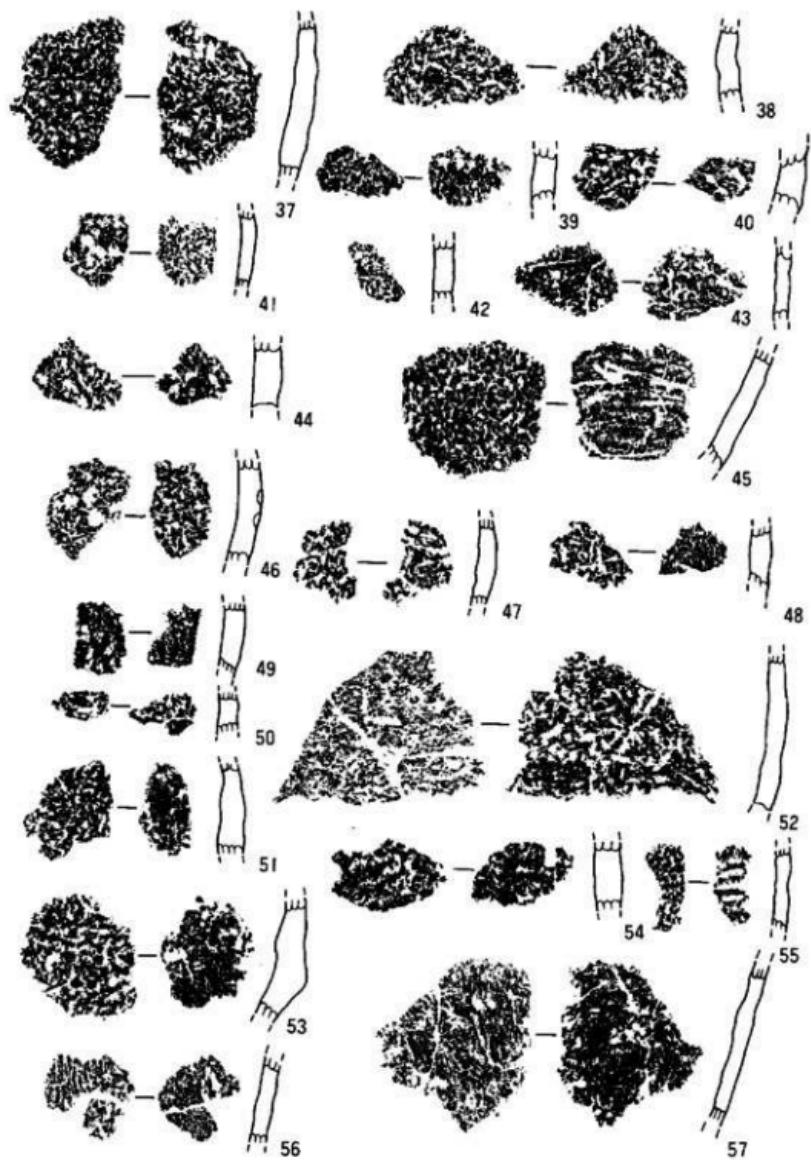
6類 (第18図-82～95)

口縁部、底部の破片である。82は若干外傾する口縁部破片で口唇部に刻み目が見られ、表裏共に貝殻条痕がある。85・86・87も口唇部に刻み目が見られる。85・86は表面のみであるが87は両面に施されている。86では口縁端部（口唇部の平坦部分）にも刻みが入っている。

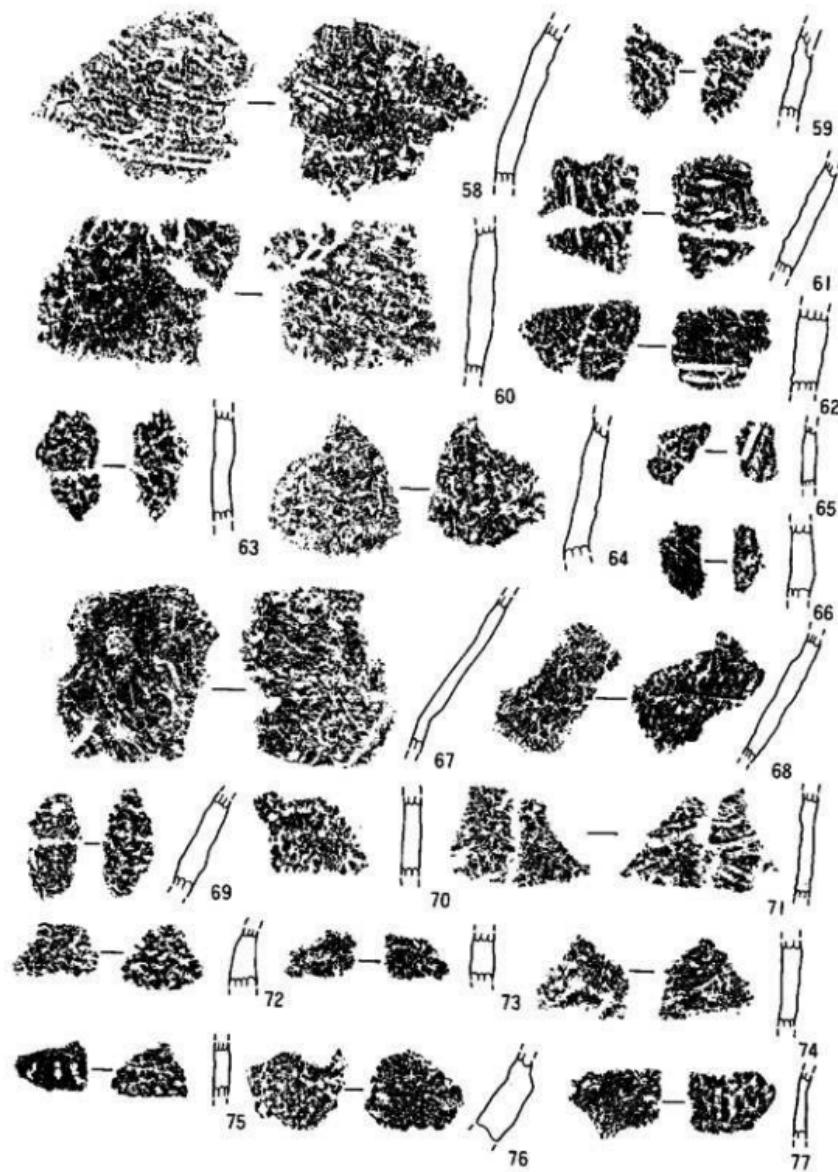
88からは底部破片である。88は胴部からやや直に傾斜し平底の底部となる。裏面に条痕がみられる。89は胴部破片であるが底部に近い破片であるためここに載せた。破片の状況が悪く、表面に条痕があるかどうか不明である。90は土器の傾斜がきつく柏畠式的な乳頭状尖底の可能性もある。91・94も同様の器形をとると思われる。92は88



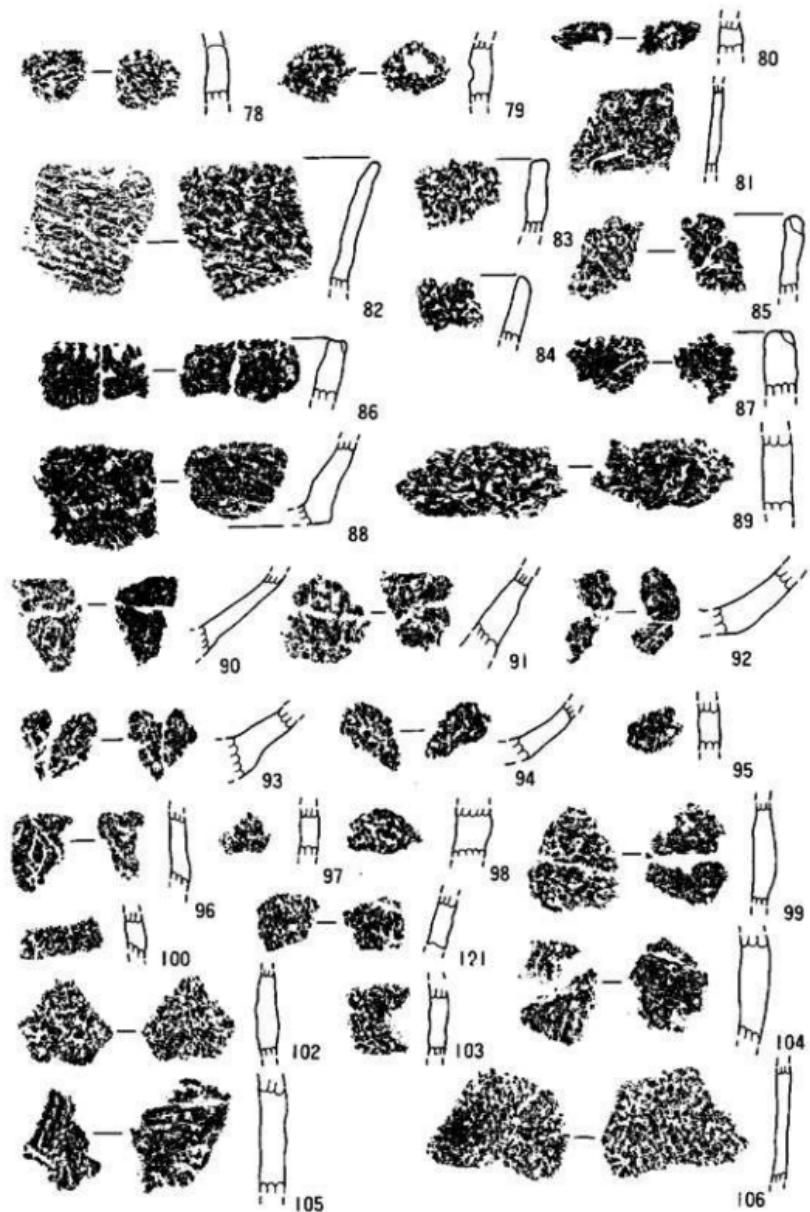
第15図 包含層出土土器拓影図 1



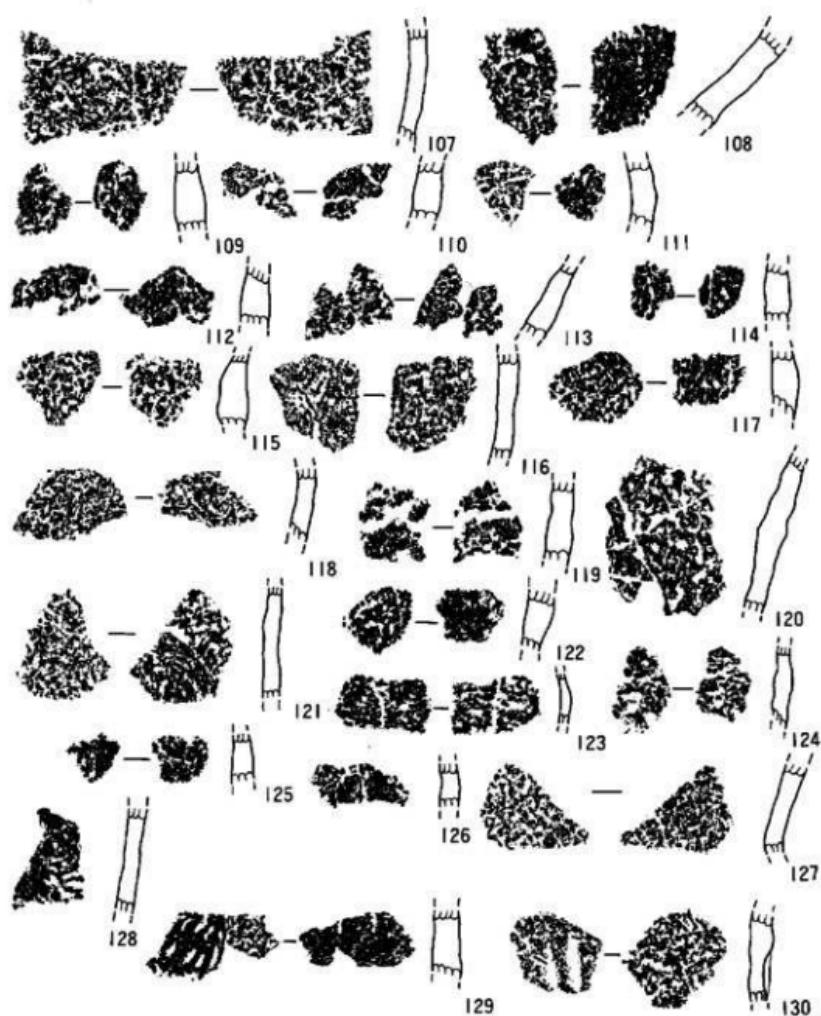
第16圖 包含層出土土器拓影圖 2



第17図 包含層出土土器拓影図 3



第18圖 包含層出土土器拓影圖 4



第16図 包含層出土土器拓影図 5

高さ cm	G/r	斜列 個体	斜列 個体	表面色調		新色調 (no)	断土 試石	断土 試石	人 物	物	植生地図		表面文様	裏面文様	部位
				暗褐色	暗褐色						苔色	苔色	苔色	苔色	
17	D5	1	2	暗褐色	暗褐色	10	S 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
18	H7	1	2	暗褐色	暗褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
19	C5	1	2	暗褐色	暗褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
20	C3	1	2	明褐色	明褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
21	C6	1	2	25	暗褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
22	C6	1	2	26	暗褐色	8	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
23	C6	1	2	24	暗褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
24	C6	1	2	21	暗褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
25	C6	1	2	26	暗褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
26	C6	1	2	23	暗褐色	7	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
27	C4	1	4	41	赤褐色	5.5	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
28	H5	1	4	41	赤褐色	5.5	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
29	B3	1	4	33	赤褐色	5.5	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
30	D4	1	1	31	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
31	H3	1	1	33	赤褐色	5.5	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
32	D4	1	1	40	褐	5.5	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
33	C6	1	1	35	赤褐色	5.5	M 1	M 1	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
34	C6	1	1	34	赤褐色	5.5	M 1	M 1	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
35	C3	1	1	34	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
36	C4	1	1	57	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
37	C4	1	1	29	赤褐色	7.5	N 4	M 1	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
38	C5	1	1	128	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
39	C5	1	1	28	赤褐色	6	V 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
40	H7	1	1	28	赤褐色	6	V 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
41	H5	1	1	77	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
42	D5	1	1	44	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
43	C4	1	1	44	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
44	C5	1	1	46	赤褐色	7	N 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
45	C3	1	1	47	赤褐色	5	N 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
46	C4	1	1	48	赤褐色	6	N 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
47	C4	1	1	49	赤褐色	7	N 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
48	C4	1	2	50	赤褐色	7	N 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
49	C6	1	2	51	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
50	C6	1	2	52	赤褐色	6	N 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
51	D3	1	2	53	赤褐色	6	M 3	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
52	C4	1	4	54	赤褐色	7	M 0	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
53	D2	1	4	55	赤褐色	7.5	M 0	M 3	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔
54	D2	1	5	55	赤褐色	4.5	M 2	M 2	苔色	苔色	苔	苔	苔	苔	苔

表3 沖縄層土土器一覧表1

番号	Gt	測定・範囲	同一 判別	表面色調	断面色調	厚さ (mm)	断面 比	断面 比	その他の 特徴	分析値		表面色調		内部色調		表面文様		内部文様		基 本 依 頼		
										内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	
56	D5	II	5	60	黄褐色	4.5	S	M	3	N	3	5.5	M	3	5.5	1.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
57	D6	II	5	61	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
58	C6	II	5	62	暗赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
59	C4	II	5	63	黑褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
60	C5	II	5	64	黄褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
61	C5	II	5	65	黑褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
62	D5	II	5	66	白褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
63	B5	II	5	67	稍赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
64	B4	II	5	68	稍赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
65	C4	II	5	69	赤褐色	5.5	M	3	3	N	4	5.5	M	4	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
66	B5	II	5	70	褐褐色	5.5	M	3	3	N	4	5.5	M	4	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
67	D6	II	5	71	心褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
68	A5	II	5	72	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
69	D5	II	5	73	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
70	D3	II	5	74	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
71	C6	II	5	75	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
72	D4	II	5	76	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
73	D5	II	5	77	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
74	D4	II	5	78	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
75	C4	II	5	79	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
76	D5	II	5	80	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
77	C5	II	5	81	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
78	C5	II	5	82	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
79	D5	II	5	83	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
80	D6	II	5	84	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
81	D4	II	5	85	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
82	D5	II	6	86	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
83	B5	II	6	87	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
84	D4	II	6	88	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
85	D4	II	6	89	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
86	D4	II	6	90	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
87	D3	II	6	91	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
88	C2	II	6	92	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
89	D5	II	6	93	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
90	C2	II	6	94	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
91	R4	II	6	95	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
92	B4	II	6	96	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
93	B4	II	6	97	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
94	R4	II	6	98	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2
95	D5	II	6	99	赤褐色	5.5	M	3	3	N	3	5.5	M	3	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2	5.5	3.2

表 4 包 傷 玉 土 器 一 覧 表 2

番号	Gr	部別	類別	同一 部位	部位	部位色調	新色調 (cm)	地 土 含 量	人物 の性	施土機械		表面文様	部位
										M	1		
96	C3	B	0	泥水器	赤褐色	赤褐色	6.5	M	1	機	出	1.ガ	+
97	D4	B	0		赤褐色	赤褐色	6.5	M	1	機	出	2.ガ	+
98	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	6.5	M	3	機	出	3.ガ	+
99	D6	B	0		赤褐色	赤褐色	6.5	M	3	機	出	4.ガ	+
100	D3	B	0		赤褐色	赤褐色	5.5	M	3	機	出	5.ガ	+
101	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	3	機	出	6.ガ	+
102	C4	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	1	機	出	7.ガ	+
103	D4	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	3	機	出	8.ガ	+
104	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	8	M	3	機	出	9.ガ	+
105	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	8	M	3	機	出	10.ガ	+
106	D6	B	0		赤褐色	赤褐色	4	M	3	機	出	11.ガ	+
107	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	6	M	3	機	出	12.ガ	+
108	C6	B	0		赤褐色	赤褐色	8.5	M	1	機	出	13.ガ	+
109	E6	B	0		赤褐色	赤褐色	8	S	3	機	出	14.ガ	+
110	B4	B	0		赤褐色	赤褐色	8	M	3	機	出	15.ガ	+
111	B4	B	0		赤褐色	赤褐色	7	M	3	機	出	16.ガ	+
112	E6	B	0		赤褐色	赤褐色	9	S	3	機	出	17.ガ	+
113	C4	B	0		赤褐色	赤褐色	7	S	3	機	出	18.ガ	+
114	E6	B	0		赤褐色	赤褐色	6.5	M	3	機	出	19.ガ	+
115	C6	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	3	機	出	20.ガ	+
116	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	9	M	3	機	出	21.ガ	+
117	C4	B	0		赤褐色	赤褐色	6	S	3	機	出	22.ガ	+
118	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	7.5	M	1	機	出	23.ガ	+
119	C5	B	0		赤褐色	赤褐色	6	M	3	機	出	24.ガ	+
120	K4	B	0		赤褐色	赤褐色	6	M	3	機	出	25.ガ	+
121	C6	B	0		赤褐色	赤褐色	6	M	3	機	出	26.ガ	+
122	T4	B	0		赤褐色	赤褐色	5.5	M	3	機	出	27.ガ	+
123	D3	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	3	機	出	28.ガ	+
124	H6	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	3	機	出	29.ガ	+
125	K6	B	0		赤褐色	赤褐色	6.5	M	3	機	出	30.ガ	+
126	I5	B	0		赤褐色	赤褐色	5	M	3	機	出	31.ガ	+
127	H6	B	0		赤褐色	赤褐色	5.5	M	3	機	出	32.ガ	+
128	C4	B	0		赤褐色	赤褐色	8	M	3	機	出	33.ガ	+
129	H5	B	0		赤褐色	赤褐色	6	M	4	機	出	34.ガ	+
130	D5	B	0		赤褐色	赤褐色	6	M	3	機	出	35.ガ	+

参考人物の部分のアルファベットはS(小:おおまか1m以下)、M(中:おおまか2mから2.5m)。
L(おおまか3m以上)で、数字は0(標準値)～5(過多値)となってい。

図5 泥水器土木工事一覧表3

に似た傾斜で平底である。93も平底であるが、柏烟式にみられる小型の平底のようである。

0類 (第18図-96～第19図-128)

文様等が不明で1類から6類までに分類できなかったものを一括した。多くのものが表面や裏面が剥落しており焼成が余り良くない。全てのものに纖維が含まれる。表に載せているが、胎土や焼成からみて同一個体と思われるものが多い。これらは同一個体が1類にある点からみて、口縁部付近に列点文がつき以下条痕のみの土器ではないかと見られる。108は傾きから考えて底部に近い部位である。

Ⅲ群土器 (第19図-129, 130)

129は柏烟式土器で焼成が極めて良好で、胎土などからみて搬入品ではないかと思われる。130も胎土に含まれる白色砂粒が大きくその量が多いといった点が特徴的で在地の土器かどうか疑わしい。これらの土器の文様であるが129は連続爪形文を横位に施しているが2本の連続爪形文の間隔が狭い。130は縦位に沈線を何本か連続させているがこの沈線は幅が広く長さもそう長くないとみられる。押し引き列点文に出自が求められる文様であるかもしれない。

第2項 石器 (第20図1～8、第21図9～13)

東横地西原遺跡出土の石器は石鎌1点、抉入石器1点、搔器1手、使用痕のある剥片3点、礫器5点、石核1点、調整剥離のある剥片1点、剥片38点(註1)、破片3点、台石1点、合計55点が出土している(第6表)。

1は石鎌である。先端部のみで脚部は欠損している。現存している長さは長軸15mm、短軸9mm、厚さ3mmである。刃部縁辺には細かい剥離があり、直線状に仕上げるためのものと考えられる。石材は黒曜石である。

2はかなり厚い剥片であり、又状になっているところから抉入石器と考えた。長さは長軸26mm、短軸19mm、厚さ11mm、刃部幅9mmである。石材はチャートである。

3～5は使用痕のある剥片である。縁辺部に不規則な細かい剥離があり、これを使用痕と考えた。3の刃部は片面のみに剥離がみられる。長さは長軸23mm、短軸13mm、厚さは3mmであり、石材は黒曜石である。4は長さは長軸28mm、短軸18mm、厚さは10mmであり、石材は黒曜石である。5は長さは長軸34mm、短軸25mm、厚さは9mmであり、石材は貞岩である。

6は使用痕のある剥片と比較してやや大きな剥片であることと縁片部の剥離が大きいところから搔器と考えておきたい。長さは長軸59mm、短軸42mm、厚さは15mmであり、

石材は頁岩である。

7は上部が欠損しているために、全形がわからないが打製石斧あるいは礫器と考えておきたい。刃部と考えられるところには摩滅等はみられない。現存部の長さは長軸52mm、短軸37mm、厚さは15mmであり、石材は安山岩である。

8は礫器である。長梢円形の自然縁の先端を打ち割って刃部を作り出しているが、刃部に摩滅等はみられない。長さは長軸88mm、短軸48mm、厚さは22mmであり、石材は不明である。

9は石核である。表面に剥片を剥離した面があり、上部が打面であるが、剥離面以外は節理面と考えられる。長さは長軸76mm、短軸76mm、厚さは32mmであり、石材は頁岩である。

10は上部を欠損しているが調整剥離のある剥片である。現存部の長さは長軸75mm、短軸50mm、厚さは18mmであり、石材は砂岩である。

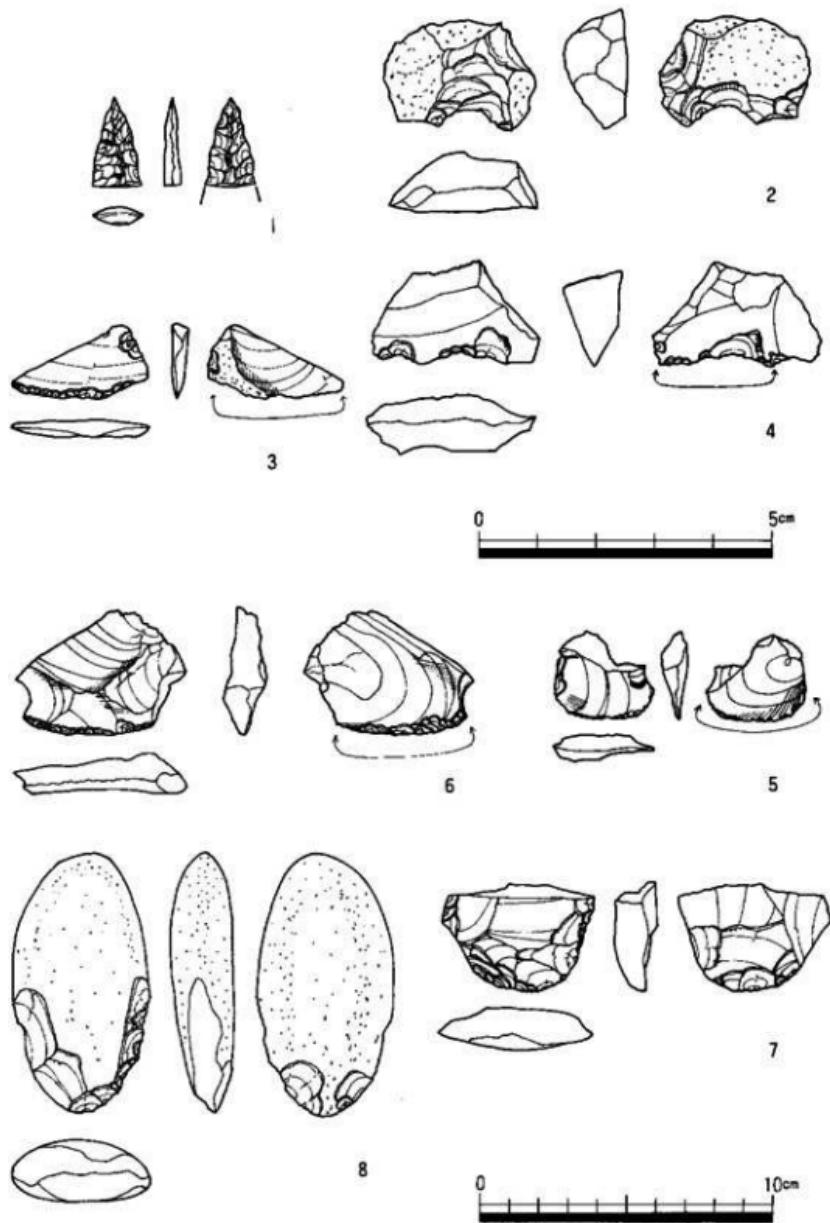
11は厚さがかなり厚いところから礫器と考えた。表面と裏面に自然面を残している。刃部等の縁辺部には摩滅痕は見られない。長さは長軸155mm、短軸86mm、厚さは49mmであり、石材は砂岩である。

12は裏面に自然面を残している。縁辺部の調整剥離はわずかであるが、11と同様に礫器と考えておきたい。縁辺部に摩滅等はみられない。長さは長軸107mm、短軸56mm、厚さは35mmであり、石材は砂岩である。

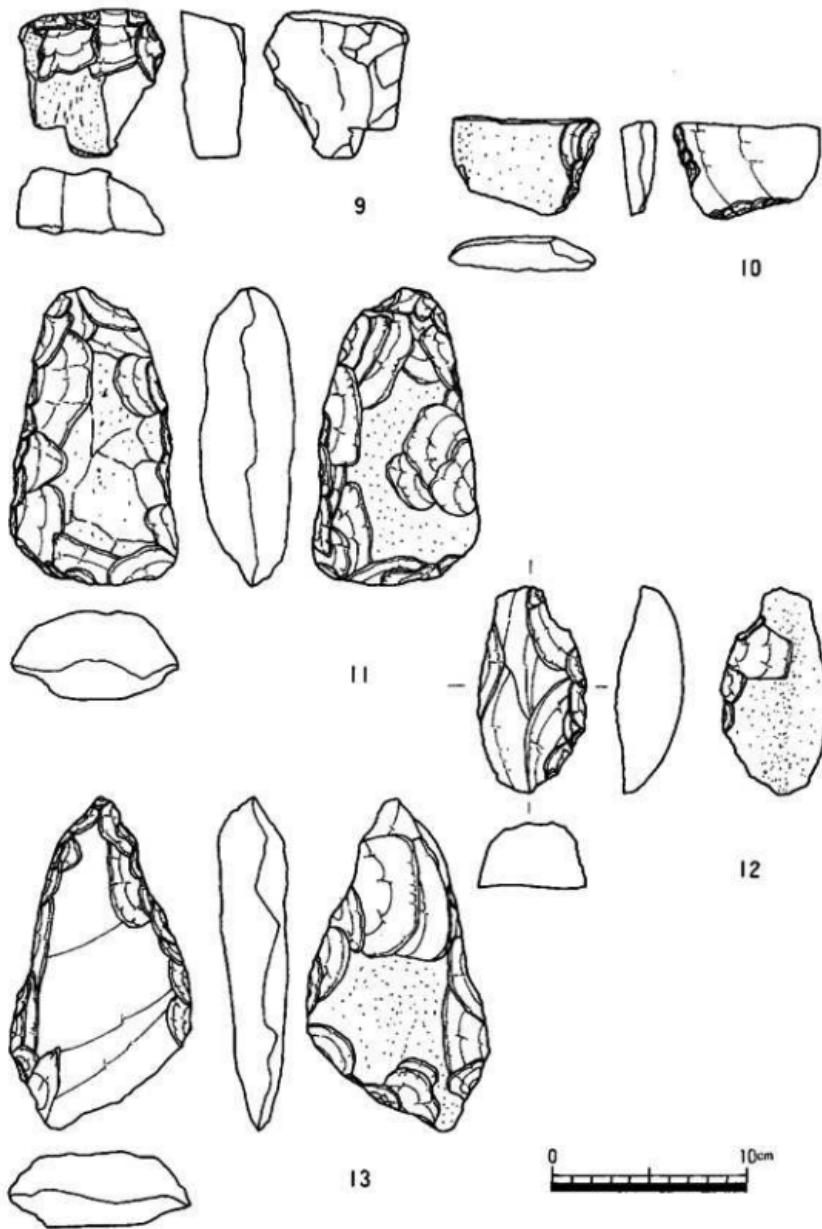
13も礫器と考えられる。裏面には一部に自然面がみられる。表面は広く主要剥離面で覆われており、縁辺部に調整剥離がみられるが、摩滅等はみられない。長さは長軸171mm、短軸94mm、厚さは36mmであり、石材は砂岩である。

No.	器種	石質	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)
1	石鋸	黒曜石	15	9	2
2	抉入石器	チャート	26	19	11
3	使用痕のある剥片	黒曜石	23	13	3
4	使用痕のある剥片	黒曜石	28	18	10
5	使用痕のある剥片	頁岩	34	25	9
6	搔器	頁岩	59	42	15
7	礫器(打斧?)	安山岩	52	37	15
8	礫器	?	88	48	22
9	石核	頁岩	76	76	32
10	調整剥離のある剥片	砂岩	75	50	18
11	礫器	砂岩	155	86	49
12	礫器	砂岩	107	56	35
13	礫器	砂岩	171	94	36

表6 出土石器一覧表



第20図 出土石器実測図 1



第21図 出土石器実測図 2

剥片は38点出土しているが、石材別では、黒曜石17点（45%）、頁岩12点（32%）、砂岩4点（11%）、チャート2点（5%）、凝灰岩2点（5%）、安山岩1点（3%）である。これらの内、砂岩と凝灰岩は他の石材と比較してかなり大きな剥片であり、この二つの石材が他の石材とは異なった用途に使用された可能性を示していると考えられる。

碎片は3点であるがいずれも黒曜石である。

石器そのものの形態からは時期を判断することは困難な場合が多いが、東横地西原遺跡出土の縄文土器は早期後半の一時期に限定できるようあるところから（註2）、今回出土した石器もこの時期のものと考えられる。砂岩製のやや大きな剥片や礫器は三沢西原遺跡出土の押型文土器と共に伴した砂岩製の石器群（註3）との関連性を考えられる。

いずれにしても、量的に少ないため、石器組成を推定するまでには至らないが共伴した土器によって時期を限定することが可能な資料であるという点において、三沢西原遺跡出土の石器と共に東海地方の縄文時代早期の石器群として、貴重な資料であると考えられる。

註

註1 剥片と碎片との区別については長軸・短軸ともに10mm以下のものを碎片、これ以上を剥片とした。

註2 土器の詳細に関しては本文中の記載による。

註3 菊川町教育委員会『三沢西原遺跡』1985年

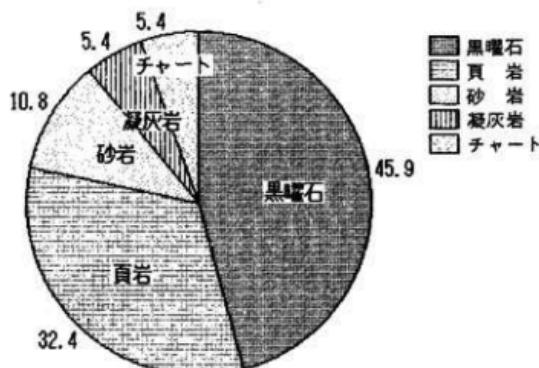


表8 出土剥片類石材構成比

No.	器	種	石質	長軸 (mm)	短軸 (mm)	厚さ (mm)
1	剥	片	岩石	33	28	6
2	剥	片	黑曜	17	9	6
3	剥	片	岩	14	10	7
4	剥	片	岩	51	29	8
5	剥	片	岩	21	20	8
6	剥	片	岩	28	22	10
7	剥	片	岩	51	44	21
8	剥	片	岩	31	17	9
9	剥	片	岩	31	16	7
10	剥	片	石	19	17	5
11	剥	片	ト	25	23	6
12	剥	片	岩	30	22	7
13	剥	片	石	10	6	2
14	剥	片	石	17	11	5
15	剥	片	石	11	8	2
16	剥	片	石	18	12	3
17	剥	片	石	12	9	4
18	剥	片	石	17	17	6
19	剥	片	石	24	9	6
20	剥	片	石	10	8	2
21	剥	片	石	15	9	2
22	剥	片	石	32	14	10
23	剥	片	石	106	43	17
24	剥	片	石	17	12	3
25	剥	片	石	17	14	6
26	剥	片	岩	60	50	11
27	剥	片	石	68	67	20
28	剥	片	石	11	6	5
29	剥	片	石	11	9	3
30	剥	片	岩	51	45	12
31	剥	片	岩	70	53	15
32	剥	片	岩	26	24	9
33	剥	片	砂	21	14	3
34	剥	片	砂	11	9	2
35	剥	片	砂	20	19	5
36	剥	片	貞	30	16	5
37	剥	片	砂	37	29	8
38	剥	片	黑	18	16	10
39	剥	片	黑	6	5	1
40	剥	片	黑	7	5	1
41	剥	片	石	5	4	1

表7 出土剥片類一覧表

E	D	C	B	
			2	
		1	3	
		1	4	
	3	2	5	
	2		6	
1			7	

表9 包含層グリット別出土石器点数表

E	D	C	B	
			1	2
		1		3
		1	4	4
		10	3	5
	2	5	1	6
	2	3		7

表10 包含層グリット別出土剥片点数表

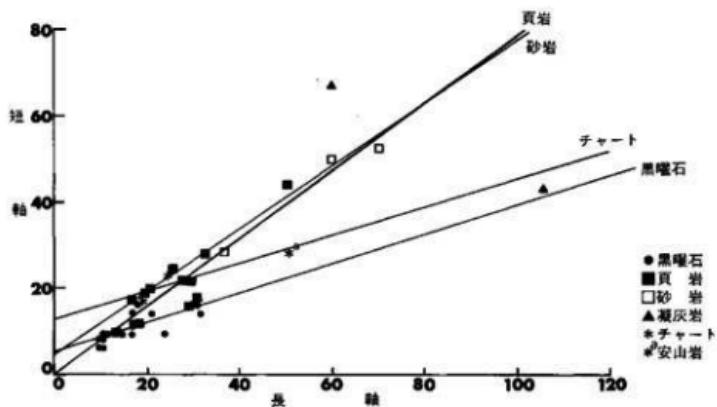


表11 石材別剥片類長軸・短軸相関グラフ

第3項 弥生時代以降の遺物（第22図）

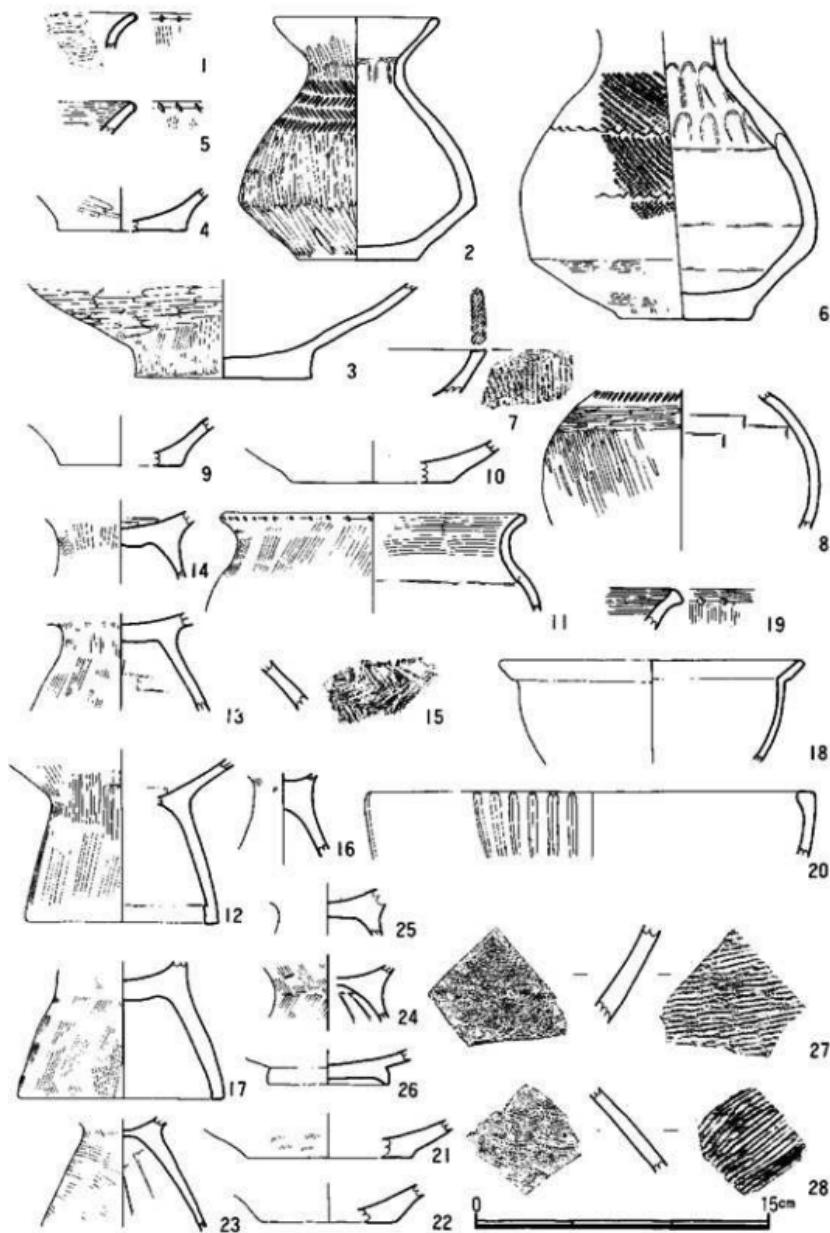
SB-1 (1) 1は、甕の口縁部の破片である。口唇部は丸く、刻みは粗雑である。内外面にハケ目調整が施されている。

SB-2 (2~5) 2~4は壺である。2は全体の器形を知りうる唯一のものである。口径8.4cm、器高12.3cm、底部4.8cmを測る。口縁部は外側に開き、口唇部を面取りしている。体部は下半で明確に屈折するものでソロバン状を呈する。頸部には櫛刺突羽状文が施され、全面をヘラ磨きされている。3・4は底部破片で、底面には木葉痕が認められる。3の底部は径9.0cmと大型なものである。5は直線的に開く甕の口縁部である。口唇部は面取りされ刻み目を深く施している。

SB-3・7 (6~14) 6~10の5点は壺の破片である。6は口縁部が欠損している。体部は丸みをもち下半で屈折し、頸部から体部上半にかけて結節繩文が施されている。胎土は粗いものである。8は丁寧なヘラ磨きが施された小型壺である。全体に丸みが強く、焼成は良好である。9・10は底部破片でいずれも平底である。11・14は甕である。11は口径15.4cmで口縁部を緩やかに外反させるものである。刻みは深く粗い。12~14は台付甕の体部で、直線的に開いている。12は端部を内側に折り返している。脚部の内面には板ナデが施されている。

SB-6 (15・16) 15は壺の体部の破片である。表面は摩滅しているが、櫛刺突羽状文が施されている。色調は赤褐色である。16は高坏の脚部である。この高坏は欠損しているが、おそらく直線的に開く脚部であろう。

その他 (17~26) 17~19は柱穴内より出土したものである。17は台付甕の台部で、直線的に開き端部を面取りするものである。18は口縁部を外側に強く折り、口唇部を肥厚させた鉢である。表面は摩滅している。19は甕の口縁部である。20~26は覆土内より出土したものである。20~22が壺である。20は複合口縁部を有するものである。口縁部には、棒状浮文が施されている。23~25は台付甕の台部である。23は色調がにぶい赤褐色で、器壁も薄いなど24・25と異なる。25は器面が風化しており、調整方法は不明である。26は13世紀の山茶碗である。高台には粉殻痕が残り粗雑な作りである。底部は糸切り後ナデ調整されている。27・28はA6区内覆土より出土したもので須恵器の甕である。いずれも焼成は良好で内面に同心円状の叩きが施されている。おそらく平安時代の製品であろう。以上のように26~28を除けばいずれも弥生時代~古式土師器である。これらを一沢西原遺跡分類に従うと、2が小型壺YA3類、6・7が小型壺YA2類、8が小型壺A類、11が甕YA2類、16が高坏KA類、18が鉢KB類、20が壺YC類である。16と18は古墳時代前期の古式土師器である他は、弥生時代後期後葉の菊川式新段階であろう。



第22図 弁生時代以降出土遺物実測図

第4章 考察とまとめ

第1節 繩文早期の土器について

東横地西原遺跡出土の土器をⅢ群に分けて述べた。これらの中でも茅山下層式の後出的な様相を持つものや、またはそれ以降の土器と思われるものをⅡ群土器とした。この項ではⅡ群十器について述べてみたい。

茅山式土器は山内清男氏によって提唱された後（註1）、赤星直忠・岡本勇尚氏によって研究が続けられ、神奈川県三浦半島の一連の資料等によって野島式・鶴ガ島台式・茅山下層式・茅山上層式という編年体系が明らかにされた（註2）。この編年研究では茅山貝塚の資料によって茅山下層式・茅山上層式が明確にされていったが、馬の背山遺跡・吉井城山第一貝塚といった資料により茅山上層式と東海系の粕畠式土器の併行関係が注目され、茅山式土器群は広く繩文時代早期後半の上器として位置付けられるようになった。馬の背山遺跡で岡本氏は茅山上層式上器と粕畠式上器を相互に関連ある別型式と認識している。吉井城山貝塚の資料や粕畠貝塚の資料によると、二つの型式の土器は共存し相互に関連のあるように見え、同時に独自性も看取でき、早期後半の地域的独自性を見いだせるのである。（註3）

茅山下層式・茅山上層式上器の研究の進展につれ、茅山下層式土器の内部の細分が進み、東海と関東の両地区にまたがって茅山下層式とその後続型式との間に介在する上器の存在が明らかになってきた。それを新型式とするか茅山下層式土器内の細分型式とするかはまだ確定的ではないが、今回出土したⅡ群土器はこの時期のものであると考えられる。

茅山下層式上器と茅山上層式上器についてみてみると。「茅山貝塚」ではほとんど遺物の含まれない第5層黄褐色土層をはさんで上に「C 条痕以外に文様を持たないもの」、下に「B 凹線あるいは刺突等によって文様構成されるもの」が検出され、二つは層位的に分離されている。「茅山貝塚」ではBを茅山下層式土器とし、Cを茅山上層式上器と分けている。「茅山貝塚」やそれ以降の各遺跡での調査・研究の結果、茅山下層式と茅山上層式は簡略化の方向で理解できることが明らかになっている。茅山下層式土器は凹線や列点による文様が付くのに対し、茅山上層式では「殆ど文様をもたない条痕におおわれただけの一群の土器」であるとされる。また茅山下層式土器の器形が鶴ガ島台式から続く有段で胴部が屈曲するものであるのに較べ、茅山上層式は屈曲が弱まり段も「たが状」に形骸化する。屈曲の消失は鶴ガ島台式→茅山下層式→茅山上層式と順を追って理解できるし、文様の簡素化傾向も同様である。このような暫移的な変化をたどるため茅山下層式と茅山上層式はその接点において理解し難いものになっている。

東海においては茅山下層式に続く土器は粕畠式土器であり、その接点でもやはり複

雜な様相をとっている。茅山下層式土器から柏畠式土器への変化も型式学的に捉えられる。この場合も器形の屈曲の消失と文様の簡素化が指摘できるのだが、柏畠式では底部の形態が特殊な乳頭状尖底を呈する点など、単純な型式学的操作だけでは理解できない内的な変化も考えられよう。

柏畠式土器は連続爪形文をその主文様とする。この文様は茅山下層式の列点文からの系譜に位置づけてよい。茅山下層式の列点文と柏畠式土器をつなぐものとして東海地方ではハッ崎I式土器がある。ハッ崎I式土器は増子康真氏によると（註4）「段を作る器形」で「斜行密接刺突文帯・刺突列点文帯を施文手段として、口端面上・口端直下内外に横帯施文し、以下に鋸歯文を直接描くのと、段の下部に描くのが特色」であるという。この土器の位置について増子氏は「単純に茅山下層式段階における沿海部での型式変容と解してよいであろうか」とし、茅山下層式と茅山上層式（柏畠式）との間への介在を考えている。増子氏が別型式として分離し、茅山下層式から柏畠式をつないだこの土器の位置づけを関野哲夫氏はさらに明らかにしている（註5）。関野氏は茅山下層式を古・中・新に3細分し、新段階から柏畠式までの間に元野・形原・ハッ崎二類をおき型式学的にスムーズな変化を想定した。関野氏は同部の段によって構成される文様帯と文様の簡素化が進む過程を茅山上層式・柏畠式への変化と捉えている。ここで示されている形原・ハッ崎例をハッ崎I式とみると、茅山下層式から柏畠式への変化は増子氏のえたものとほぼ同じになろう。先学諸氏の考え方からゆくと茅山下層式は次のように変化をしてゆくことになる。



茅山下層式から次型式への変化は簡素化であるが、茅山上層式・柏畠式の二つの土器は簡素化によって残ったものが違うため別型式になったと理解できるのではないだろうか。茅山上層式では茅山下層式の器形を主に残し、柏畠式では文様を主に残している。この型式変化の間を埋める土器が東海でハッ崎I式とされている十器だが、それぞれの型式にどう変わったかが今の所明確ではない。ハッ崎I式の好資料は滋賀県米原町磯山城遺跡で報告されている（註6）。ここでは茅山下層式からハッ崎I式土器を介して柏畠式へ変化していく過程が明確に捉えられる。磯山城遺跡の資料では柏畠式への変化は、茅山下層式の器形が屈曲を失い、それにともなって文様帯を失うことになった列点文が柏畠式的な単純な直線状連続爪形文になってゆくと理解できる。磯山城例では柏畠式への変化であるが同様に茅山上層式への変化が想定できる資料が関野氏の提示した一連の資料であろう。このようにハッ崎I式段階の十器はいくつかの形態をとりながら茅山上層式と柏畠式という二つの型式に分化しているのである。この分化が地域的な理由からかそれとも別の理由によるかは今のところつまびらかではないが、地域的な差異が上器型式を分けているようである。このことから考えると

ハツ崎I式段階期の土器は後続型式の違いによっていろいろな様相をとり、ハツ崎I段階と後続型式を考え合わせることにより各地域毎の土器型式の姿がより明らかになる。後続型式の茅山上層式を関東系・柏畠式を東海系とすると各地域が早期のこの段階にどの地域の様相を帯びていたか、あるいはその地域の独自性がどの程度あったかがある程度までは判るのではないだろうか。

東横地西原遺跡II群土器は、編年的位置づけはハツ崎I式期であろうが、後続する型式が何であるかは明確ではない。文様構成がわかる33の列点文は文様が単純化した時期のものであることを裏付けており、同時に段や屈曲がほとんど見られない点からもハツ崎I段階期であることを示唆している。本遺跡では継続する型式が判然とはしないがII群土器のいくつかのものは興味ある事実を示している。5類の条痕のみの土器が多い点は、茅山上層式的といえなくはないだろうか。53・57・58・87を見ても柏畠式よりも茅山上層式を考えられるし、82・85の口縁部破片では時期も茅山上層式まで下らすことが可能かも知れない。一方90や93の様な底部の存在は柏畠的であり、61のように土器内部に爪形文を押捺する事例も茅山上層式的ではない。以上のような諸点からみると、本遺跡II群土器は型式及び時期ではハツ崎I式からそのやや後出段階期ではあるが、後続型式が柏畠式とは限らない。磯山城遺跡で確認されたものと似て柏畠式への変化が推定される個体もあるが、東海地方で認識されているハツ崎I式そのものばかりではなく、茅山上層式への変化をも十分想定できる土器群ではないかと考えられる。東遠地区の早期土器はまだ資料的に少なく対比されるものが少ないため確定的なことは言えないが、当地域の土器様相は多分に関東的であるが、東海的な要素が決して少なくはないとしてよいであろう。

補注

- 1 山内清男 「日本先史土器図譜」X II集 1941 (1967年再版合冊)
- 2 赤星直忠 「神奈川県野鳥貝塚」『考古学集刊』1 1948
- 岡本 勇 「三浦鶴ガ島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告』5 1961
- 赤星直忠・岡本勇「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告』1 1957
- 3 岡本 勇 「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」『横須賀市博物館研究報告』3 1959
- 岡本 勇 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」『横須賀市博物館研究報告』6 1962
- 杉原在介 他 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究(1)」『考古学』8-10 1937
- 4 増子康真 「ハツ崎I式土器をめぐって」『古代人』41 1983
- 5 関野哲夫 「茅山下層式土器について」『古代』80 1985
- 6 中井 均 他 「磯山城遺跡」 1986

第2節 弥生時代以降の竪穴住居跡について

今回の調査で12軒の住居跡が検出した。これらは、土器から判断し弥生時代後期後葉から古墳時代前期の住居跡であることが明らかになった。当遺跡の住居跡の特徴をまとめると以下の通りである。

- ① 住居跡の大きさは、4m前後で方形に近い隅丸方形を呈する。柱は4本柱である。
- ② 住居跡は地形に沿って縁辺部に立地し、稜線上（中央）には、SB-2があるのみである。さらに、切り合い関係は存在するものの溝が巡らされている。
- ③ SB-1・3・7に見られる副柱をもつものがある。

①の特徴は、三沢西原遺跡でも同じ特徴を示している。また、袋井市愛野向山遺跡では約100軒程の住居跡が調査されている。その住居跡の規模は4～5m前後で平面形のほとんどが方形に近い隅丸方形であった。竪穴住居跡は、弥生時代中期から古墳時代前期の住居跡の平面形態は橿円形から隅丸方形そして方形へと変遷していくという傾向が東遠地域に見られる。この傾向は、県内においても一般的な傾向とされ東横地西原遺跡も例外ではない。

弥生時代遺跡の調査は、登呂遺跡（1943）の調査にはじまり、田方群堇山町山木遺跡（1962）、菊川町白岩遺跡（1968）、浜松市伊場遺跡（1977）など底地遺跡が中心の調査が進められてきた。しかし近年の調査で掛川市八景山・原新田遺跡（1987）、袋井市一色前田遺跡（1981）、島田市田ノ谷遺跡（1985）など丘陵地上の遺跡が注目されるようになった。特に袋井市愛野向山遺跡は、この周辺の高位地性遺跡のありかたを考える上非常に重要な遺跡であり、今後の調査の報告がまたれる。高位地性遺跡は、一般的に弥生時代後期に爆発的に増加する傾向が見られる。このことは、軍事的な緊張関係によるものや人口の増加によるものなどさまざまな意見があるが、今のところはっきりしない。東横地西原遺跡は高位地性（段丘）遺跡としての一遺跡にすぎないが、今後この地域の河岸段丘上の集落の規模・構造・集落の存続時期の分析を通して、社会構造の解明をしていかなければならない。

②の特徴は、中央にSB-2以外に住居跡が見られず、大きな空間を有しているのは如何なる理由によるのであろうか。また巡らされた溝は、住居跡と切り合い関係を有しているが、環濠の可能性もあるう今後の研究の進展を待ちたい。

③の特徴は、壁溝内に副柱をもつものである。副柱の大きさは、柱穴より小規模で2本が1単位となっているようである。また副柱は、主柱穴と主柱穴の中間にあるのではなく、どちらかに寄っているのが特徴である。この副柱は住居の入口に関連する遺構でないかと推測される。もしこれを入口とすると、それは、地形的制約を上げることができよう。住居跡は急激に落ちる段丘の縁辺部に位置し、さらに外側に溝が存在するため、入口部は当然高い方（中央）に求められるをえない。また炉は

副柱に対し中央より奥に存在する傾向にあり、入口部に炉を設けないのが通常であることから、やはり副柱を入口部の施設と考えられるのが妥当である。副柱が認められたのは、SB-1・3・7であるが、他の遺跡では、三沢西原遺跡のSB-25がある。SB-25は焼失家屋で残りの良い住居跡であった。副柱は北側壁の壁溝に認められる。この住居跡は、南側縁辺部に立地しており北に平坦地が広がっている。菊川流域では、現在のところ発掘調査例が少ないため類例は上記の2遺跡のみである。その他の地域でもほとんど類例がないのが現状である。

住居跡の調査は多いが入口部を確認できた遺構は今までほとんどないといってよいであろう。東横地西原遺跡では副柱を入口部に付随する遺構と仮定したが疑問がないわけではない。今後、住居跡の発掘調査で入口部の構造について、注意して進めいかなければならないと感じた。

おわりに

今回の調査は調査面積2,000m²調査期間が一ヶ月という非常に期間的制約のきびしい調査であった。そのため雨でもかっぱを着て行なった。また、遺構の検出も非常にむずかしく計画通りに調査が進まなかつたが、作業員の皆さんのがんばりによって約一ヶ月で調査を終えることができた。この場を借りて作業員各氏の苦労に対して感謝したい。

また本稿をまとめるにあたって向坂鋼二、川江秀孝、鈴木敏則、賤元洋、松井一明、吉岡伸男、松本一男、渋谷昌彦、坂巻隆一、島田冬史の諸氏から御教示・御指導を戴いた。末尾ながらここに記して深く謝意を表したい。

参考文献

- 増子康真 1981 「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階 本文編・増補改定版』
- 百瀬忠幸他 1988 「八座遺跡」『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 堀越正行他 1974 『美濃輪台遺跡 A地点』
- 堀越正行他 1975 『美濃輪台遺跡 B地点』
- 建設省中部地方建設局 1983 「菊川…その周辺」
- 向坂鋼二 1983 「弥生後期の集団関係」『静岡県考古学会シンポジユーム』5
- 袋井市教育委員会 1981 「袋井市一色前田遺跡」
- 松井一明・吉岡伸夫 1987 「愛野向山遺跡」『日本考古学年報』
- 浜松市教育委員会 1977 「伊場遺跡構造編」
- 後藤守一 1962 「圭山村山木遺跡」
- 松本一男 1987 「八景山・原新田遺跡」『静岡県考古学会』
- 島田市教育委員会 1985 「田ノ谷遺跡」
- 静岡県教育委員会 1968 「東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 菊川町教育委員会 1985 「三沢西原遺跡」

東横地西原遺跡

1988年3月30日発行

編 集 静岡県菊川町教育委員会
発 行 静岡県菊川町教育委員会
印 刷 株式会社開明堂

写 真 図 版



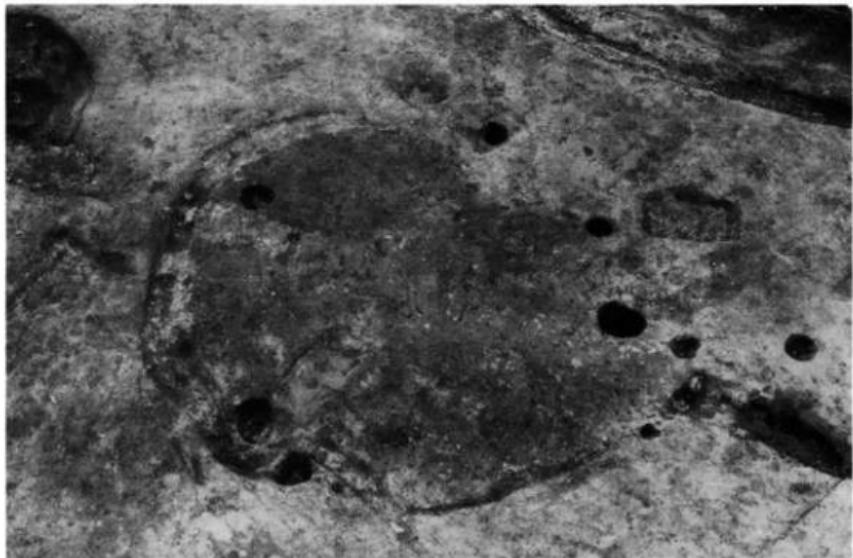
遠景写真（北より）



上面完掘状態（航空写真）



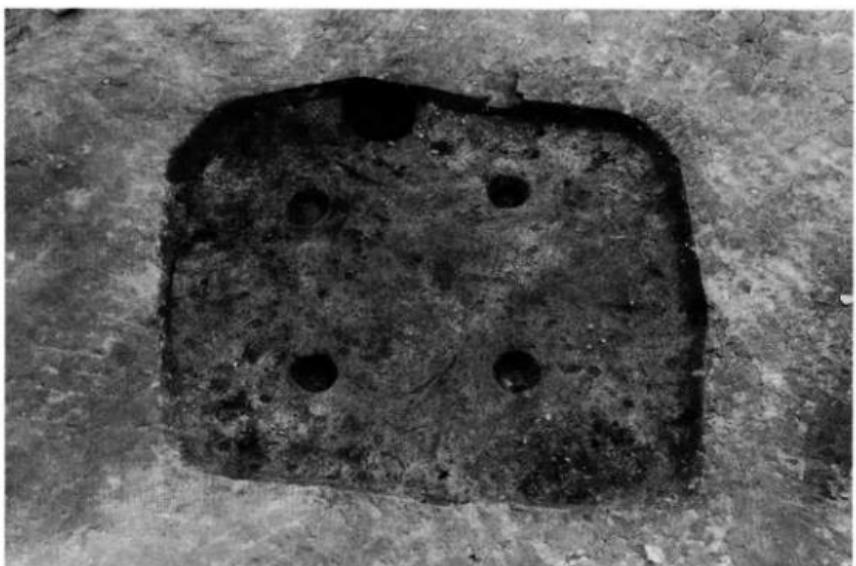
下面完掘状態（航空写真）



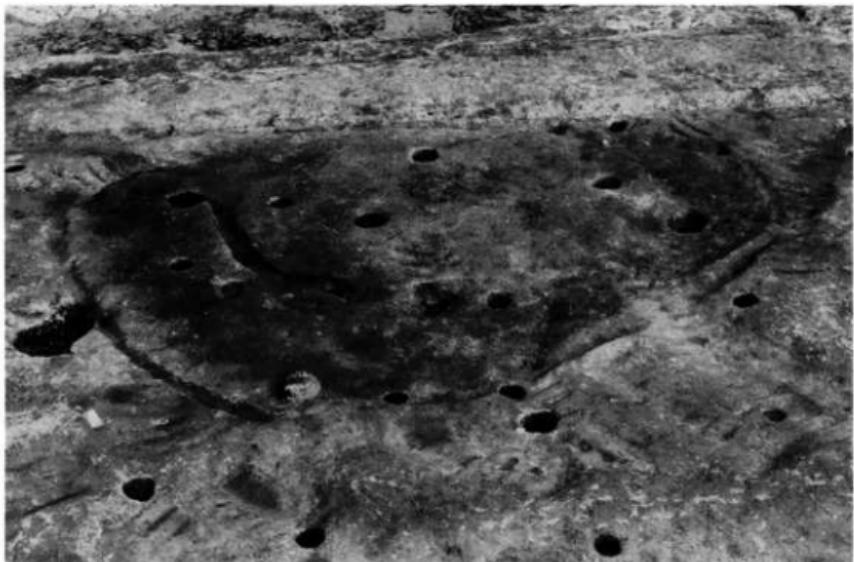
S B - 1 完掘（東より）



SB-2 内遺物出土状態（北より）



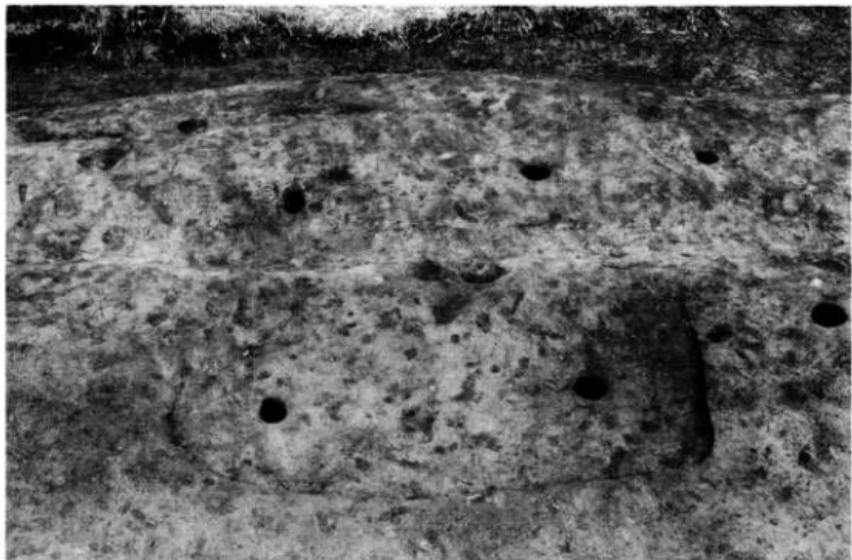
SB-2 完掘（北より）



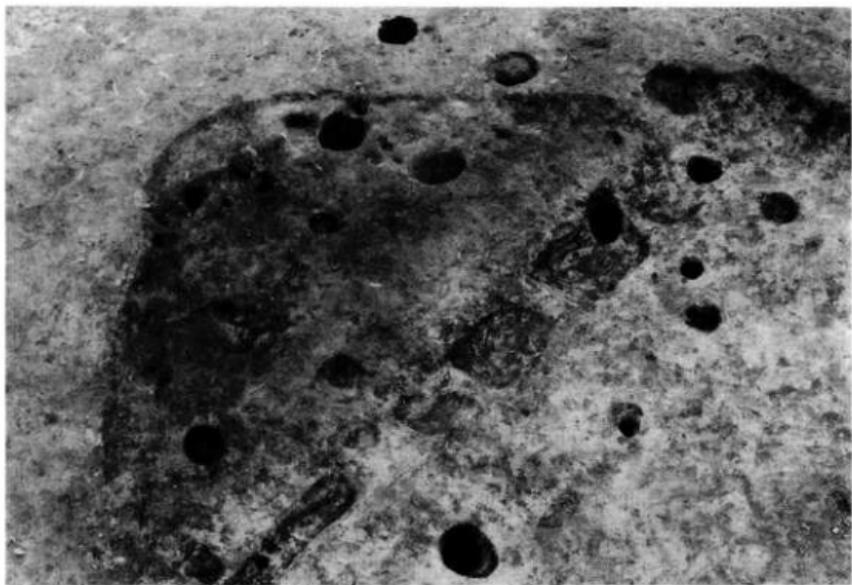
SB-3・7 完掘（西より）



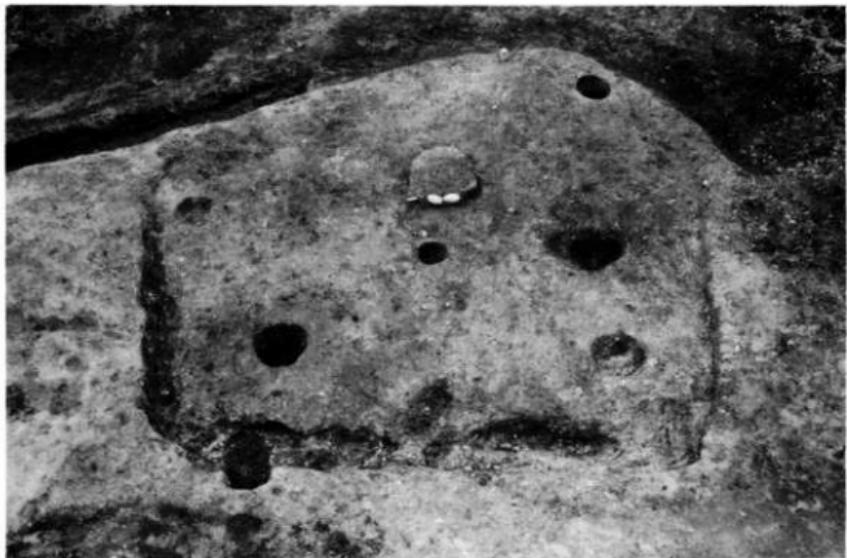
SB-3・7 完掘（北より）



SB-4 完掘（西より）



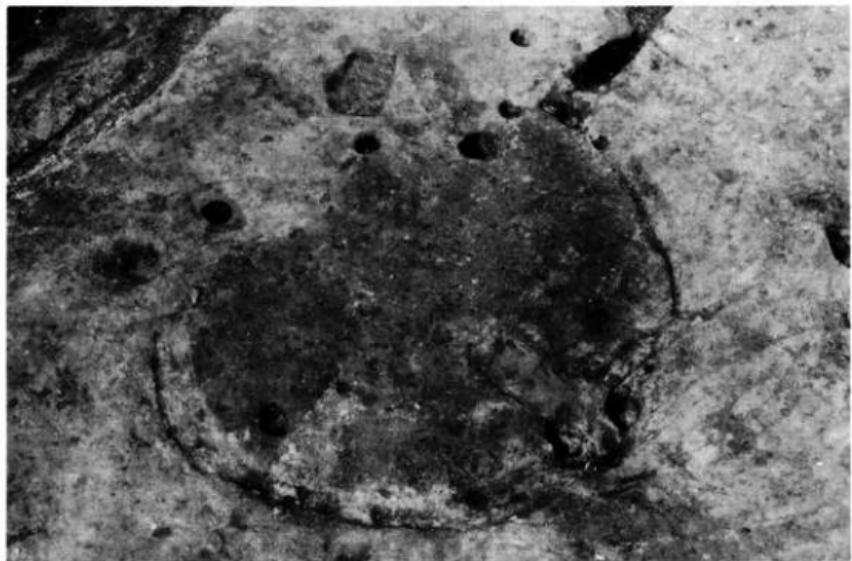
SB-5 完掘（北西より）



S B - 6 完掘 (東より)



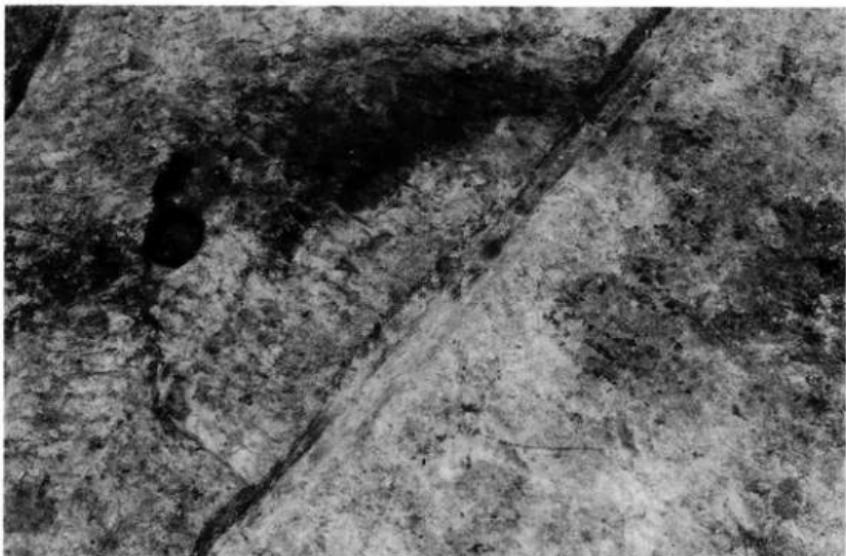
S B - 6 内炉跡 (西より)



SB-1 (東より)



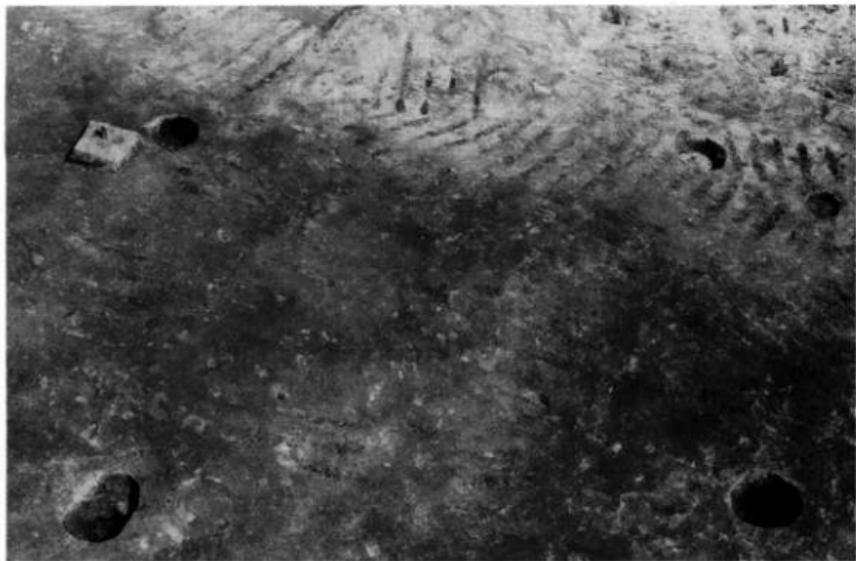
SB-1・6 完掘 (東より)



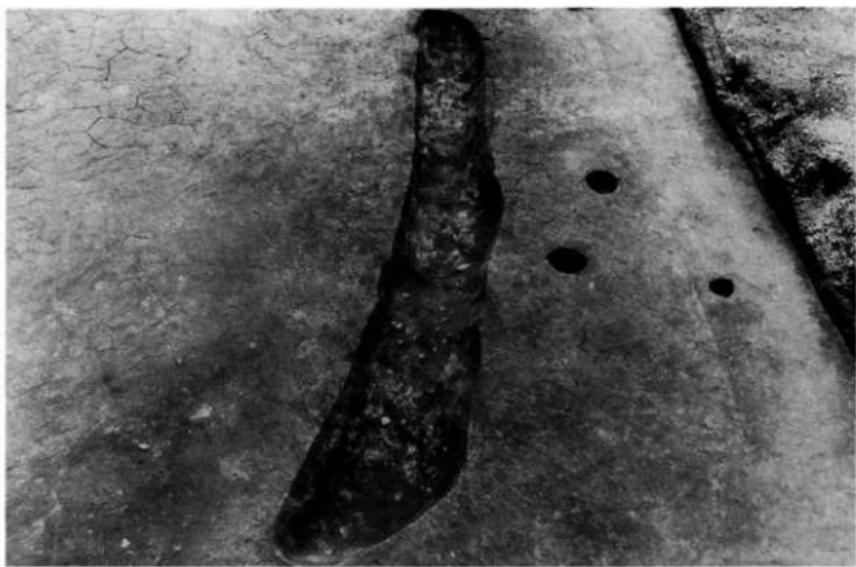
SB-8 完掘（北西より）



SB-10（西より）



S B - 11 完掘 (西より)



S D - 1 完掘 (北より)



SK-2 完掘（東より）



SK-1 完掘（南より）



礫分布状態（南より）



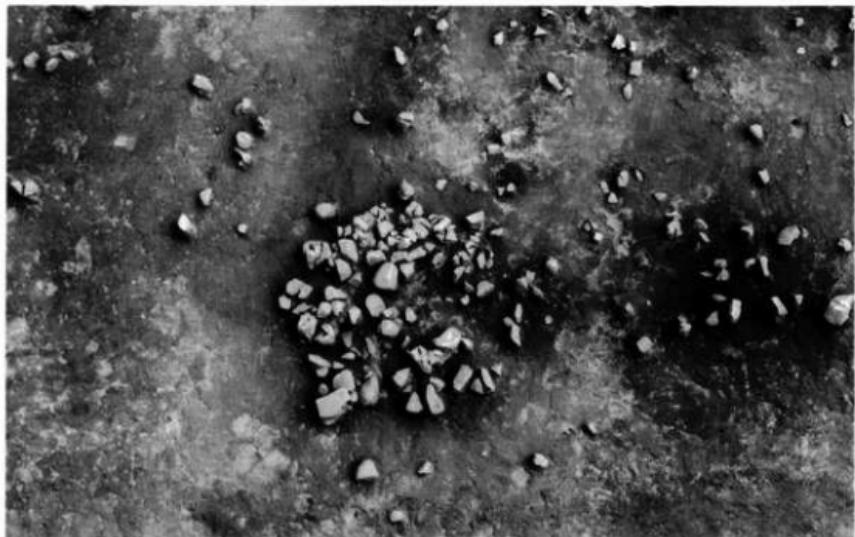
礫分布状態（西より）



礫分布状態（北より）



礫分布状態（西より）



1号集石土坑（西より）



1号集石土坑完掘（西より）

22・23・26

19・28・29

(表)

33・38・30

46・45・52

(表)

22・23・26

19・28・29

(裏)

33・38・30

46・45・52

(裏)

82・83・85

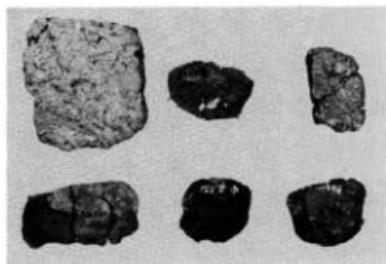
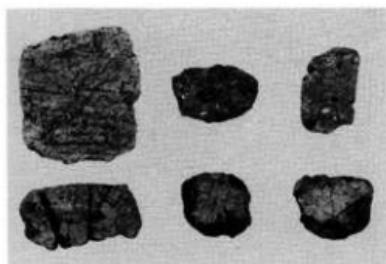
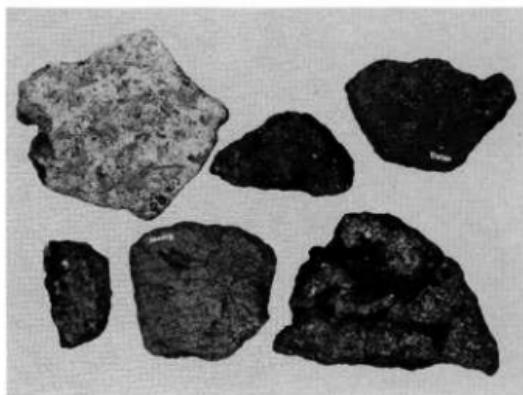
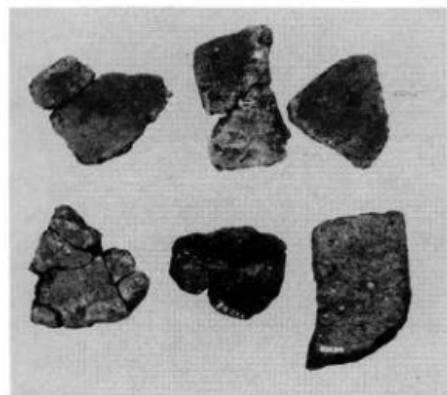
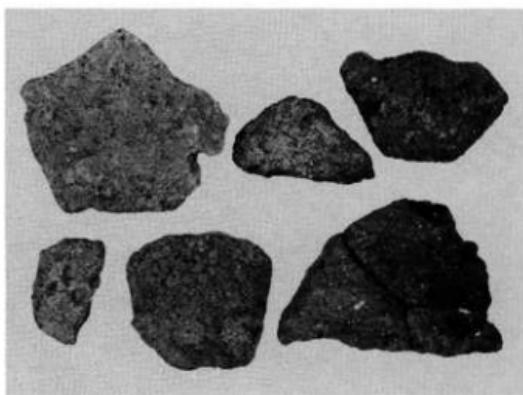
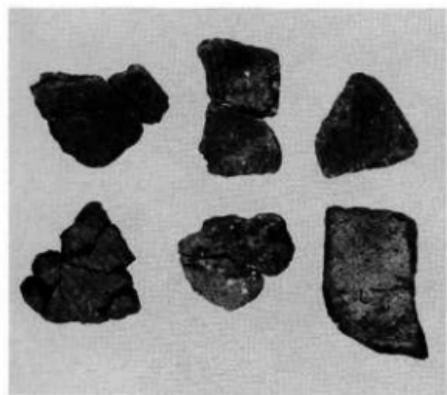
86・84・87

(表)

82・83・85

86・84・87

(裏)



67・58・
60・57
⁶⁸
(表)

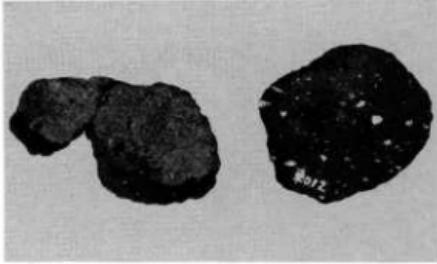
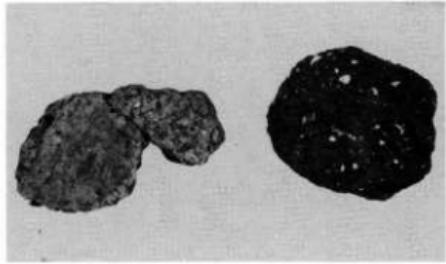
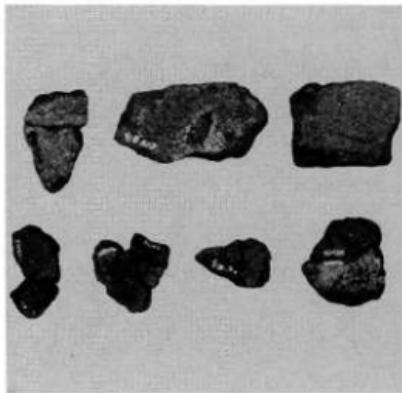
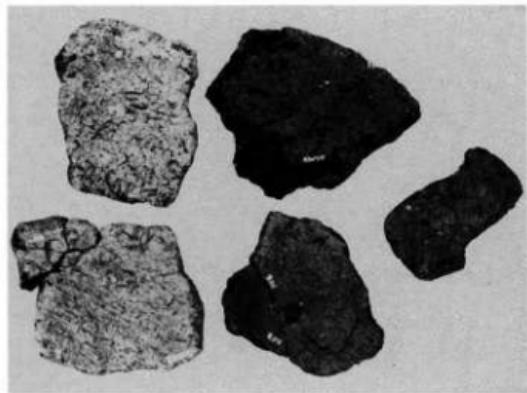
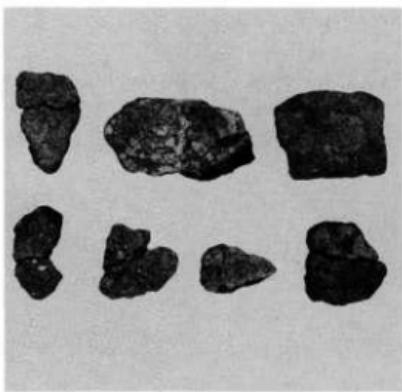
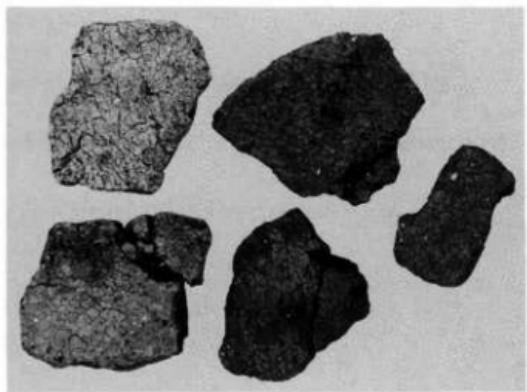
90・89・88
92・93・94・91
(表)

67・58・
60・57
⁶⁸
(裏)

90・89・88
92・93・94・91
(裏)

129・130
(表)

129・130
(裏)



105・106・107

121・120・127・117

(表)

105・106・107

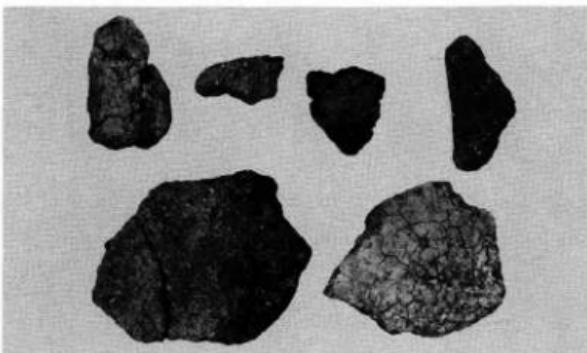
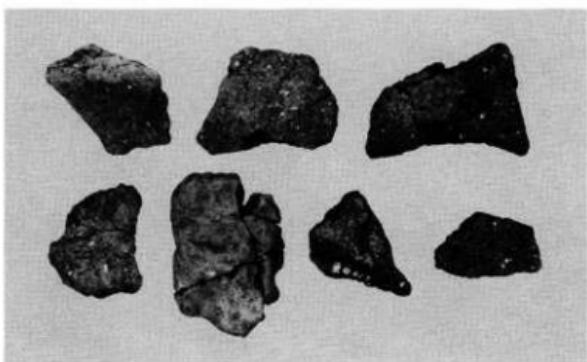
121・120・127・117

(裏)

5・3・2・1

7・6

(集石土坑出土遺物)



1・2
3・4
(表)

1・2
3・4
(裏)

5
(表)

5
(裏)

6
(表)

6
(裏)

7
(表)

7
(裏)

8
(表)

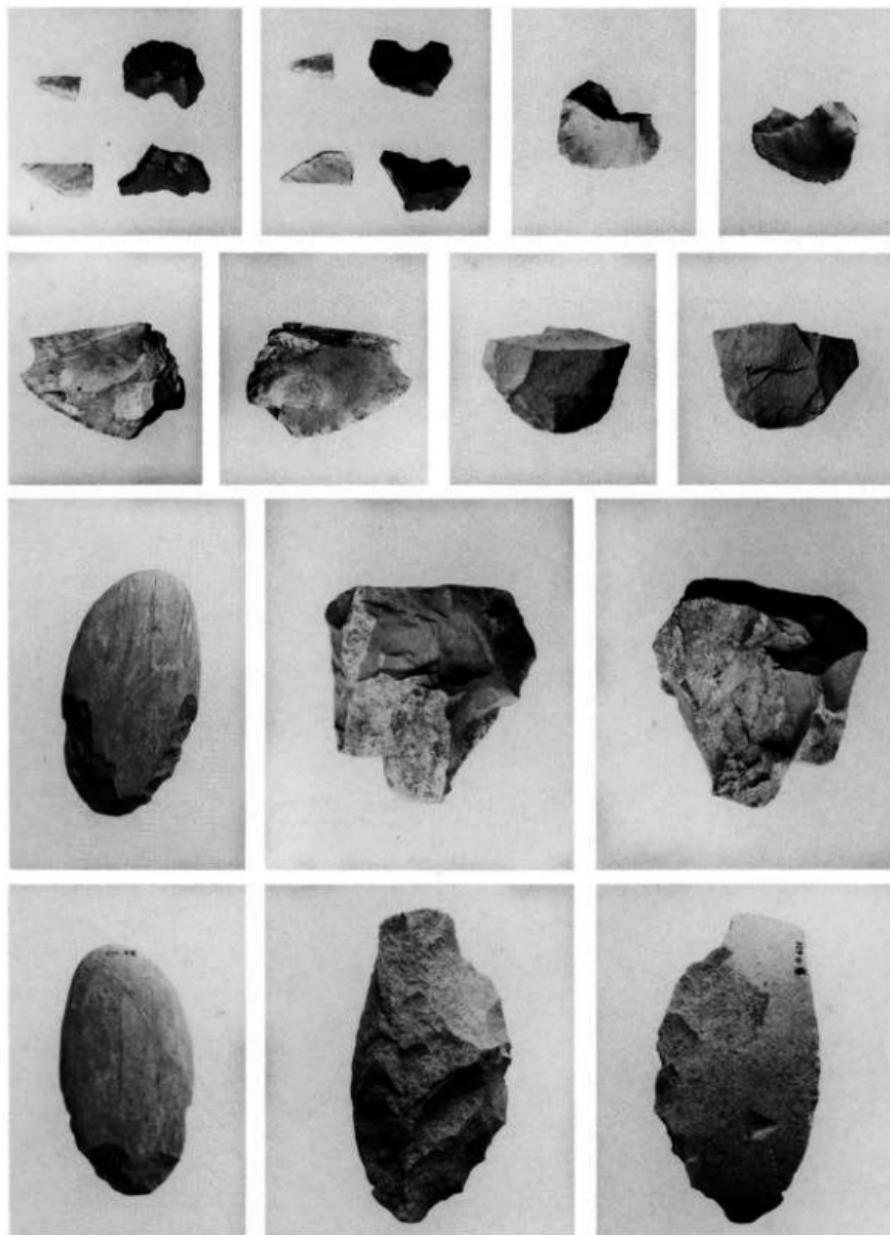
9
(表)

9
(裏)

8
(裏)

12
(表)

12
(裏)



11
(表)

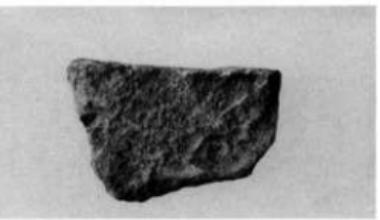
11
(裏)

13
(表)

13
(裏)

10
(表)

10
(裏)



16

1 · 4 · 5
7 · 9 · 10

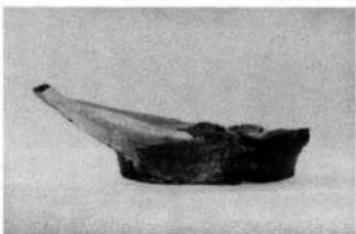
3

2

12

17

6



13

8 • 11 • 19

18 • 15

14

20 • 21

24 • 22

23

25

26

28

27

